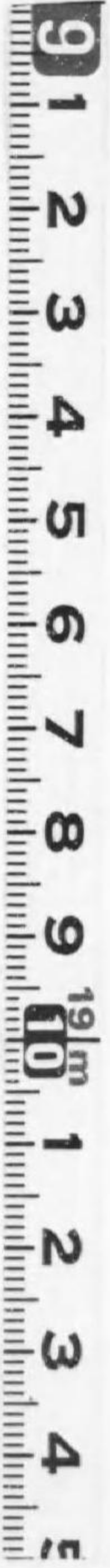
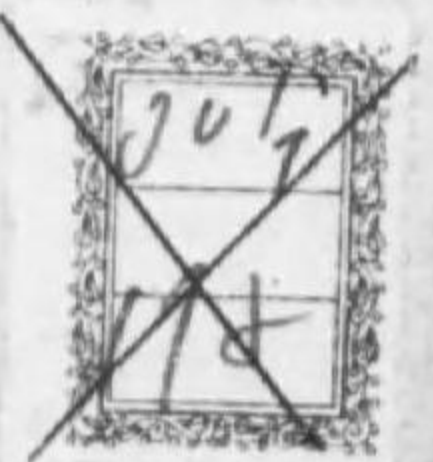


特116

899

靈妙術傳書



始



靈妙術目次

第一章 序論

第一節 靈妙術と靈覺

第二節 靈妙術とは何ぞ

第三節 靈示の目的

第四節 靈示の區別

第五節 靈示の直接と間接の別

第六節 靈示と聯合作用

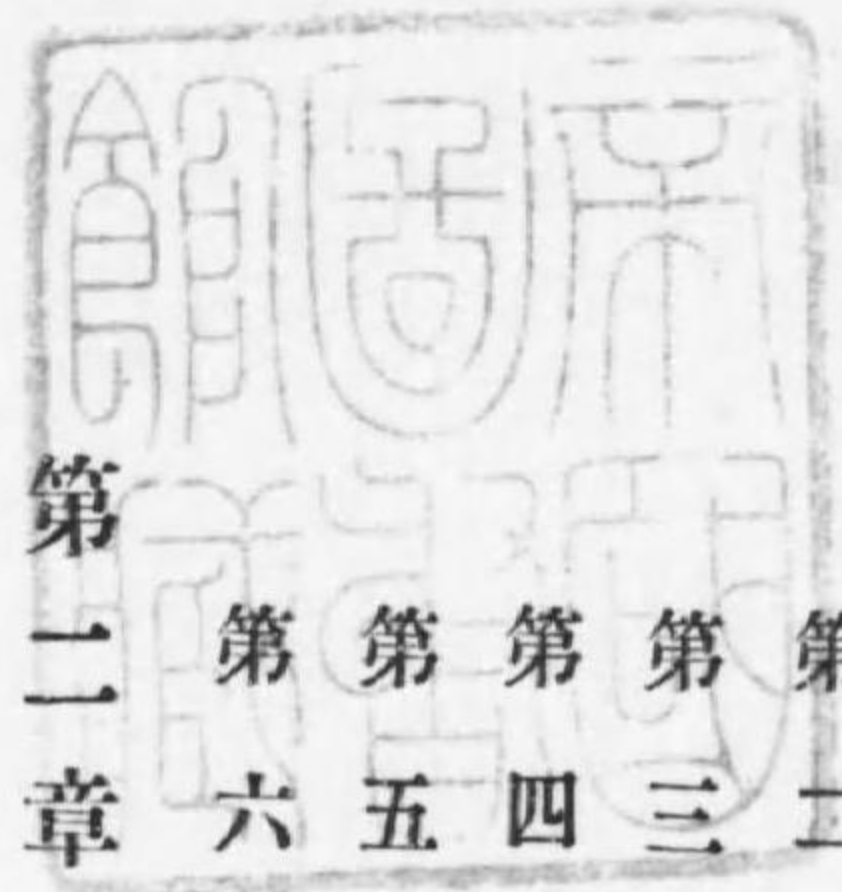
第二章 靈示の方法

第一節 靈示の奥義

第二節 可能靈示の撰定

第三節 自己靈示の開發

第四節 靈示は明瞭なれ



一 〇 一五 二二 二三 二四 二五 二八 二八 三〇 三一 三二



第五節	思想は確かなれ	三三
第六節	思想の發表	三三
第七節	用語は明瞭なれ	三四
第八節	奏効顯著の靈示	三六
第九節	靈示は積極なれ	三六
第十節	靈示は斷定するを要す	三七
第十一節	靈示は秩序なれ	三八
第十二節	靈示は各方面より	三八
第十三節	靈示は繰り返すこと	三九
第十四節	靈示秘訣の結論	四〇

第三章 靈示と現象の關係

第一節	序 說	四一
第二節	靈示と心的現象	四二
第三節	靈示と生理現象	四五

第四節	靈示と隨意筋の運動	四五
第五節	靈示と不隨意筋	四六
第六節	靈示と模擬活動	四七
第七節	靈示と止動	四九
第八節	靈示と緊張狀態	四九
第九節	靈示と幻影の錯覺	五〇
第十節	靈示と感覺の銳鈍	五三
第十一節	靈示と情感	五五
第十二節	靈示と安産法	五六
第十三節	靈示と分泌	五八
第十四節	靈示と組織變化	五九
第十五節	靈示と心理現象	六〇
第十六節	靈示と殘續現象	六五
第四章	施術と考按	六七
第一節	靈妙術施術の準備	六七

第二節	靈示と期待	七一
第三節	靈妙術準備奧義	七三
第四節	靈示感應と諸覺	七四
第五節	靈示と靈性高潮	七八
第六節	靈感作用と生理障害	七八

第五章

施術と觀察

第一節	靈示法	八〇
第二節	靈示と第三者	八二
第三節	靈示に必要な器具	八三
第四節	靈示の難易	八三
第五節	靈示と男女と年齢	八四
第六節	靈示感應と身神の傳否	八五
第七節	靈示感應と連否の鑑別	八八
第八節	靈示施術上の注意	九〇

第九節	靈示と單調刺戟	九二
第十節	靈示と意識の制限	九三
第十一節	靈示感應の時間	九四
第十二節	靈示感否の鑑別	九五
第十三節	靈示の生命	九九
第十四節	靈示と心的方法	一〇〇
第十五節	靈示と豫期	一〇四
第十六節	靈示と擬擦の方法	一〇八
第十七節	靈示と眼球壓迫——按撫	一〇九
第十八節	靈示と單調刺戟	一一〇

第六章

施術安全法

第一節	靈示と解除	一一〇
第二節	靈妙術に對する誤解	一一三
第三節	過激なる靈示を禁す	一一四

第四節	靈示に反する不良豫期	一一五
第五節	靈示睡眠利用法	一一七
第六節	靈示と童幼	一一八
第七節	靈示と乳兒	一二〇
第七章 應用の基礎		
第一節	靈妙術治療	一二一
第二節	疾病の治療	一二二
第三節	靈妙術療法	一二五
第八章 靈術妙應用		
第一節	靈妙術と手段	一三五
第二節	靈妙術と疾病	一三八
第三節	靈妙術と治療法	一四〇
第四節	靈妙術と健康	一四四
第五節	靈妙術と生活	一四五
第六節	靈妙術と靈覺の活動	一四六

靈 妙 術

第一章

序 論

吾人の日常生活に於ける諸現象は極めて平凡俗習なり、然れども之れ最も切實にして至寶緊要の門題なり。

有形無形の渺茫たる萬象は直接間接に多少の因縁を有するものなり。先づ自己を中心として最も關係薄くして最も遠きものより漸次交渉ある事象に接近し來りて其利害關係は益濃厚となり、密接不離の状態となり遂に一微の思想行動も相互に影響せずして止まらざるに至る。

廣大無邊の蒼空は吾人の思想知識を以て想像の限りを盡すとも、只空々漠々として遂に何等の確實なるものを得ることなし。而して此等天空の現象は吾等俗人の生活に毫も直接の關係を感ぜざるが如きも、天文學者は之が研究に孜孜として怠らず、天象を考へ曆數の妙理を應用し物理の法則を

發見して人類社會の利用厚生に大なる貢獻をなしつつあるなり。是れ天文學者と天象の現象とは關係深きがためなり。

又地象に於ても地球の化成地上の廣袤、水陸の形狀等も人類分布、國境領土の區劃、交通文物の發展等一として腦中に無き無關係者あれども、此等は天文に關するよりも一層密接なる關係あれば學者は地質地文より政治、文學、交通、貿易、陸海軍等百般の事物は益精細なる研究をなし、關係愈濃厚となれり。

斯く此の密度を加ふるに従ひ相影響する所甚だ深大となるものなり。彼の塞耳維の王儲の暗殺は遂に世界の大亂を起せり。英獨の一勝一敗は世界の物價を上下せしめウイルソン大統領の一言は我財界に影響することあり、故星亨の死は世界を震撼せしめたることありて一聲一言はよく全世界に相影響するに至れり。

此れ密接不離の關係する力に因るものにして、吾人の生活も宇宙森羅萬象にして漸次近接し來りて、益深く強く相影響するものなり。

然り而して最も深刻なる密接の關係あるものは、自己てふ靈性と自己て

ふ肉體との關係程近きものはあらず。

天は吾人が何事を爲すとも冷然として顧みざるが如し、之れ關係薄きが故なり、吾人の行動生死は世界各國には殆んど何等の影響する所なし、之れ關係弱きが爲なり。吾國內に在りては吾人の行爲は何等かの影響あるべし、之れ多少の關係あればなり。更に進みて己が一家にありては己の一舉一動は一層深大なる影響を及ぼす、之れ關係すること親密なるがためなればなり。

更に一步を進めて自己其者の一動一念は、直ちに自己の靈性に身體に影響するを覺ゆべし、之れ相互間に於ける關係膠漆も密ならざるものあればなり。

而して吾人の靈性作用は強弱大小一々肉體に影響し、身體の一爲一行は悉く靈性に關係する者なれば、今更ながら吾人各自の生命を保障し健康を保持して、人生の目的を遺憾なく達成せしめんには、此の密接不離にして靈妙不可思議なる原理を知悉することは至寶至急の事とす。

然り天空地理世界世事のことは知らざれば知らずもあれ、先づ人として

は人生の活動の作用を知り生活の出発点を定め、生命の根元、健康の原理を識りて、福祉ある生活をなすべし。

四

吾人生活に於ける最も緊急にして最も切實なるものは何ぞや、必要なるもの多々ありと雖も、第一に擧ぐべきは呼吸是れなり、呼吸は五分間之を止むれば人は死を免るべからず、吾人の生命中之れより急迫なるものありや、故に此の自然的必須の呼吸を題目として研究し人身の各部との關係を調べ種々説明を試みて何々呼吸法何々式呼吸と稱するも、古來呼吸法の研究を以て治病長壽の奧義とし之を以て一の秘術としたり。

支那古代には道教の神和導氣なるものを修道し、印度にては數息觀と言ひ神身の妙諦を極めしものありて、近世科學的に發見したる獨特の秘術の如く言ふは笑ふ可きこと、す。呼吸の方法に様式を用ゐず健康なる者の呼吸する姿勢、状態は之れ健全の呼吸法なり。

吾人は天與の呼吸を爲すと共に靈性の旺盛ならんことを望むものなり。呼吸の必要なるは言ふを要せざるも、呼吸の次に吾人の生活に必要なものは運動なり、進化論者の教ふるが如く人類の原始はアミバーより進化

し來れるものとせば、靈性に伴ふ運動によりて進化したるものならん、原始時代は扱て措き人身二百四十種の筋肉は生命の在る間、之を使用鍊磨すると共に靈肉互綯の促進發達を爲すものなれば吾人生活上の大要素の一なり。

古代印度の波羅門の導引法と言ひ、支那の太古にも「華陀が五禽の戯」と言ふものあり、わが國にも翠竹庵養生論にも種々運動法あり、神社の祭禮には必ず御神木、神輿、山車等の類を昇き或は引き廻し遶り歩くなど、又盆踊りの如き天理教の踊りの如きは宗教的靈性涵養と共に肉體の運動と關聯せしめ、偏重片輕の弊を妨ぎ神肉並進を應用したるものならん、又禊教の祖井上正鐵が信徒をして、土堀り水汲み其他の雜行を爲さしめ以て病者弱者を強健ならしめんとし、此等は皆一の運動療法の併用なり、而して運動は健全なる信念と合せ用ふれば確かに吾人保健の特權なりと信ず。

次に吾人の生命を保持するに必要なは、食物を攝取することにて之又切實なる要求なり。人は攝取する飲食物の性質によりて身體、性質、感情等に變化を及ぼすべきは否定し難き所なれども、食物は必ずしも人生々活

五

の原則とするに足らず、人は化學的に創造せられたるものにあらずして、化學以上の一の靈妙なる力の存するものあり。故に時と所と境遇とにより、自然に順應すべく進化し來れる者にて、尙進みては總ての境遇に適應すべく進展すべき性質のものなれば常習となれる飲食物は、之を同化する靈妙なる力を益旺盛ならしむべきものなり。

人間がエデンの禁果を食して墮落したりと言ふは深き意味の存することにて、諺にも「病は口より入る」と之れ千古不磨の鐵言にして、現今の人は飲食物の奴隸となり、墮落しつゝある者の頭上の一針にして、飲食物の慎むべきを教へたるものなり、然り吾人をして強健ならしむる者は、食物の種類定量に因らず已が消化する量に因るものなれば、要するに肉體を害するものにあらずれば、何物を食するも以て身を養ふに足るものなり。

又人には刺戟に對する抵抗性ありて、氣候の變化に耐へ氣壓の高低に堪へ乾濕を凌ぎ、其他有形無形の刺戟に抵抗し耐へ得る機能ありて之を練磨する時は、保健向上に新勢力を與ふるものなり。

冷水浴、寒氣浴、日光浴等の方法を別に技術として講ずるの必要なし、

此等は日常生活に織り込むべきものなり。

以上外界より肉體に及ぼすべき切要なるものに就き梗概を述べたり。此等は總ての境遇によく順應し向上し進化するに絶大の力あり、此力なくして人生は進化發展向上の創造力なるものなし、本會は之を稱して靈妙作用と謂ふ。此の靈妙力は、外界より來る刺戟によく醇化すべき肉質を創造する作用を有す、吾人は此妙用によりて體内に受容せられたる者を良く同化更新して、活氣と動力とに富める體軀を作り、自己の生命健康を保障し人生存在の目的を爲さしめんことを期す。

人に靈妙の氣あり、天地無雙の靈寶なり、此寶は上は宇宙に亘り下は四海に滂湃たるものなり、故に靈妙は宇宙の太靈と直接交體融和し得るものなり、其欲する所、望む所に従ふ、即ち身を修めんとせば身修まり、家を齊へんとせば家齊ひ、國を治めんとせば國治まり、天下を平にせんとせば天下治まるものなり、之を擴むれば天地の外にまで及び、取り收むれば我方寸の中に隠れて有る微し、誠に神妙至極の靈寶なり。此の珍寶を良く守れば、人は其欲する所に従ふ、此の珍寶を捨つれば人間に活動なく、社會

に發達なく、天地も又痿せん、加之ならず神化の道も亦熄まん、太虚三歳宇宙の鬼神造化生死も悉く此靈妙の包含する所なり、此の靈妙の作用は人生をして不可思議靈妙ならしむるものなり、豈に學はずして可ならんや。

自己に於ける靈妙の作用を見るに常に外部より來る、有象無象の物を内に同化して身體の原動力となし、二十貫内外の體軀を自由自在に使用して、天地神明に肉薄するの大事業をなす、今假りに此の靈妙の力を失ふたりとせんか、其刹那より吾が肉體は解滅に歸するのみ、自ら動く所のもの毫もあるなし、已に自己との關係全く絶ちたるが故なり。

今此靈妙力の内部より五官覺に及ぼす現象を見るに、總て感情の過激なる、刺戟を受けたる時は、眼は正相に物を認識せずして錯覺幻影を起し、耳は不正確となりて耳鳴幻聽を伴ひ、皮膚は温寒軟硬も漸次不正確となり來る、口は甘き物も味なく食思減退し自然營養機鈍り、嗅鼻も正確微妙の能性を失して異狀を呈するに至る。

以上の如く靈性と身體とは密接なる關係あり、靈性の變化は直に肉體に變化を生じ、又身體に變化を生じたる時は靈性にも影響するは人のよく知

る所なり、如何に靈性のみ快活にせんとするも、肉體に深大なる異狀あらば其目的を達すること困難なり、肉體に異狀なく強健なる人も一朝變事に逢ひ靈性痿弱狂奮せんか、忽ち身體に關係を及ぼし健康を損ふべきは又疑ふべきものなし。

京都府の素封家の夫人にして慢性腎臓炎其他二三の合併症にて、京都大阪東京等の大病院なり名醫なりの治療を受け數年に亘るも尙癒えず、素より迷信的療法を好まざりしも、難症不治のため効力ありと言ふことなれば試むるに若かずとて、或る禁厭の名人を聘したるに、病人に向ひ貴方の胃の下にジャクと言ふものあれば如何に名醫の治療を受くるとも寸効なく、何日まで服藥するとも癒ゆることなし、然しながら私に術あり法を以て之を符すれば忽ち癒ゆべしと、即ち禁厭を行ひ符せしに忽ち癒えて歡喜し居れり。

又佐賀縣の人片山某女と言ふは、京城大韓病院にて治療を受けしも何等の効を認めざりしが、病症は犬神が憑依したりと言ふ心的疾患なりしが、此種の病氣は弘法様の力に依れば必ず治せんとして秀峯師の祈禱を受けしに、

行法中發作して四匍ひとなり、三尺五尺と飛び上り跳ね廻りて坐敷を狂ひ踊る状態、宛ら犬の如く、魔の如くに感ぜられたりしが、數回の施法にて全癒したり。

又京都府下の人にて智齒發生困難のため口中腫れ塞がり遂に飲み物も通ぜざるに至り、此儘に看過する譯にも行かざれば最早や冷水吸蛭塗布薬も効なく、大先生と信ぜられし醫學士西村精陽氏を立會に乞ひしに、先生來りて舌壓へを所持せざりしかば、打診槌を以て舌壓に代へ殆んど塞がりて開かざる口中に差し入るゝや、不思議にも腫瘍物は破裂して多量の膿汁漏出し忽ちにして輕快し大に喜び謹謝せり、傍にありし人々其妙に驚けり、大先生又事の意外なりしに愕きしも、其場を濁し歸り後にて病者の感想を聞きしに其患者曰く、西村先生は最新の技術を以て未だ我々の知らざる機械を以て我が口中に入れらるゝや、巧に切開し下されしため痛みを感ぜずして、斯くは全治したりと。

其他實例多きも之を省略す、要は人の靈妙作用の肉體に變化を及ぼす偉力は恐るべきものあるを知るべきなり。

第一節

靈妙術と靈覺

前に述べたる如く、人には諸感覺を通して來る外來の刺戟を受容して識覺を作り、或る種類の識覺は群をなして念覺を形成し、又或る種類の念覺は類衆して更に高等なる靈覺を構成するものなり。

此れは心理學者の學理學名に一致せざるのみならず、大に理論に反するが如きも、普通心理學的説明にては、靈妙術の解釋に不便なれば、茲に本會獨特の系統を作り説明と理解とに的らしめんとす。

靈覺は念覺の全部を統一支配する最高感覺にして、又念覺は識覺の全部を統一支配する感覺にして、識覺は各部感覺を統一支配する感覺にして、各部感覺即ち五官は、外來の刺戟を受容することを主る、而して各感覺は外部よりの刺戟若しくは傳達を受けずとも、先きに經驗したる印象により感覺を感じたるものとして、他の各感覺に傳へ又各單獨に感じて他の各感覺に達せざることあり。又事物の刺戟を感ずるも識覺に傳へたるに止まり

て念覺に傳へざることもあり。又感覺より識覺を経て念覺に達して止まり、靈覺に傳へざることあり。

五官感覺を一とし、識覺を二とし、念覺を三とし、靈覺を四とせば、一覺より直ちに四覺に傳ふることあり。

又一覺より二覺に傳ふるも、三覺四覺に傳へざることあり。又一覺より直に三覺に通ずることあり。普通は外來の刺激を五官の感覺を感じ識覺に傳へ識覺より念覺に及ぼし、念感より靈覺に反ほすを順序とす。

人が始終一定の人格を有して大なる變化なきは之の四覺の調和を失はざるがためなり。此の四感覺の調和と肉體との調和は即ち理想健全なる状態とす、肉體と四感覺との違和變調は即ち肉體的疾病にして、四感覺の調和を失ひ異常の働きをなすもの之を精神的疾病と言ふ。

肉體的にも靈的にも種々無數の過不異常を呈するにより識覺の分裂、人格の變化等を生ず。

例へば

今日正午某所に行かざる可らざる事ありしに、其出發前重要なる用件に

て來れる客ありて正午を過ぐるも要件果てず、モウ行かざれば遅くなる
とて心は既に某所に行き居るも身は尙茲にあり。

とする時識覺は時間なれば行かざる可らずと、命じながら識覺の一面に於て差支へのため實行難を生ず、此に於て經驗による念覺、換言すれば識覺の支配者たる念覺は行くべきか行くべからざるかを決定す、尙靈覺に於ては先方にては待ち居れりとか、行けば必ず禍ひあり、とか換言せば俗に言ふ所の虫の知らせなり、之は靈覺の作用に基くものにて一覺よりも二覺を、二覺よりも三覺を、三覺よりも、四覺を、上なる感覺ほど統一的支配権あり正確なりとす、斯の如きが故に、第二覺の我は良くない事と知りつゝも肉體の慾望に驅られて、或る行動を實行するに、第三覺は之を制肘し之を叱責し、決して第二識の思ふが儘に遂行することを得ず、又之と反對に第二覺に於ては善良、或は義務と思ひながら、其行爲が肉體に不快を與へ、或は苦痛を感じしめ、其行動を厭忌する時あり、之れ第三覺の力なりとす、斯る時最高位にある第四覺は之を奮起せしめ、必ず遂行せしめんとして、決して第二覺の爲すが儘を許さず、又第三覺の爲すが儘をも許さず、然る

に第四覺の命ずる所に背反する時は、如何にも其叱責と苦痛とを感じて、神身の満足と平和とを得ること能はず、世に良心の呵責と言ふは即ち之れなり。

此四覺の一面は抽象的作用をなし、他の一面は具體的活動をなす、抽象的方面は常に靈的作用と密接關係して活動し、具體的方面は常に肉體と聯關して活動す。

吾人の生活の大部分は一覺二覺を普通とし、三覺の活動は稍少なく、四覺の活動は更に少なしとす、されど靈的生活の多き人は三覺四覺の活動益盛なり、此の三覺四覺の勢力偉大なる事は一覺二覺の上において、一度四覺に印象すれば、牢乎として抜くべからざる威嚴を以て全感を支配するに至る、是れ即ち靈感なりとなす、二覺一覺は遂に如何ともすること能はず、靈妙術の起る所以にして靈示應用せんとする者は此理を理解し、現象を左右せんとせば現象を支配せる感覺、若しくは一段上なる感覺に靈示印刻を附與せざる可らず。

然らば如何にして此靈的感覺を左右し得べきか、是れ靈示法にして章を

追ふて詳にせん。

第二節

靈妙術とは何ぞ

心物萬象の關係は粗より密に入り、微より幽に入り、玄より靈に歸して其不可思議なること殆んど測る可べからざるもの之を稱して靈妙と謂ふ、この靈妙變化の理を體得して之を應用する技術を靈妙術と言ふ。

吾人已を外にして對象事物を云爲するとも、遂に歸結する所なかるべし、有象無象の世界は、先づ心を基礎として築かるべきものなり、されば自己の心象を確立することを要す、心象を確立せしめんには、靈肉は綯へる繩の如く調和し強健と創造とを期せざる可らず、されば自己能力の増進すること大なるべし。

此等の問題を實現せしめんには、一の導火線とも稱すべき、靈示作用に因らざる可らず、靈示は感覺より進行して、二覺三覺四覺及び其兩面に働きて、此等の目的を達成するものなり。

此より最も簡短にして自然的現象の實例より説き、漸次其靈示術とは何なるやを知らしむべし。

一人の悪戯を爲すものあり、通行人の多き街路に架れる橋欄より意味ありげに河中を覗きしに、他の人何か珍らしき事又不思議なる事のあるやと思ひ、一人寄りて覗けば何事もなきに馬鹿見たりと思ひつゝ、過ぎ行くに、又後より來るもの續々として一應橋上の同一場所より覗く事を繰り返せり。予が父の言ふ所によれば、或日の事、昨夜鬼ヶ城山に大火事ありし、翌日福知山に出で人に語りて曰く、鬼ヶ城山には昨夜の山火事に大なる大蛇の焼け斃れ居り、多くの人々辨當を携へ見物に行く人陸續たり、早く行て見られよ再び見ること難しと言ひしに、福知山の人は昨夜の山火事を目撃し居り、尙鬼ヶ城山には大蛇の居る事を聞けると、其人が焼跡を通りて來る人なるより、忽ち靈示作用を起して男女老幼幾百人辨當を作りて見物に出掛けたる騒ぎをなさしめたりと、山火事は事實なりしも大蛇も小蛇も斃れ居らざりしなり。

明治四十五年の頃、同福知山在なる某村に石龍とて巖石の罅隙に白蛇の

潜棲せるあり、參拜して祈願せば一人一つの思ひ事は何にても叶はずべしとの宣託なりと、誰言ふとなく言ひ觸らしたるより、附近の者は言ふまでもなく京都大阪より見物參詣の祈願者絡繹として日々數千人なるに至れり、忽ち路傍に茶店の軒を列ぬる事數十軒なるを知らざりき。

然れども、白蛇にあらず生物にあらず、大なる蛇の脱衣を以て殊更其一部を窺ひ知らしむるやう仕掛けたるものなりしと云ふ。

此等は皆直接間接有形無形の靈示の奏効せる適例なり。

以上の例により靈示とは、略如何なるものなるかを了解せらるゝことと信ず、然して此等靈示を類別すれば、其種類甚だ多し。

而して靈示は、教訓なることあり、命令なることあり、教唆なることあり、行爲なることあり、説教演説なることあり、意志なることあり、思想なることあり、境遇なることあり、理想なることあり。

即ち一つの何等かの衝動が或る一の觀念と聯合して、他の一觀念を喚起する場合を稱するものにて種々なる形式を以て顯現するものなり。

此等の例證により、人々の靈示に感ずる精神的状態を観察すれば、吾人

生活上實に觀過すべからざる重要な眞理なることを發見すべし。

總て人間の意識なるものは、潮流の如く時々刻々過ぎ去り起り來りて少しも停止せざるものなれば、外部より來る刺戟は此の潮流にて諸種の波動を惹起するものなり、被感者に在りては此等の刺戟、即ち靈示に對し其性質を調ぶることなく比較的無意に容るゝものなり、然して此等靈示に感じたるものは自働的に生理的に心理的に作用を惹起するものなり、靈示を受するに多少の遲速あり、之れ左の點に起因す。

一、觀念聯合の素質なきものは何故なるかの疑を起し或るものは反對をも爲すことあり、刺戟として來る所のものにして全くそれが何を意味するや要領を得ざる時は、只何等の作用を起すことなし。
例へば一過したる震動の如く、風のためなるや地震のためなるや車輛のためなるや不明なるが如き時なり。

二、觀念の聯合に都合よきものは、直に受容して疑ひを起すことなく、反對することもなく批評することもなく感受するものなり、吾人の習慣による「いろはに」と言へば「ほへと」と豫備聯合の觀念を起

すが如し。

三、觀念聯合により新觀念を惹起したれば、全く機械的自働的に活動作用を始め實現するに至る。

此の如き事象は一注意を拂へば目前の一現象にも見ることを得べし、觀念聯合運動の最も顯著なるは精神的感應の状態に於て證することを得べし。茲に人あり、汝の家は數十年前一青年の縊死を遂げたる事ありと告ぐ。之を聞ける某は果してさる事ありしや否の疑を起すか、或は戯談なりと聞流すか、全くさる事なしと思惟す、之れ第一なり、而るに又他に人あり同一事件を其人に告ぐるに、常に信用せる人なれば此問題は事實ありし事なりと信ずるが如き、即ち第二なり、而して又尤も確實なりと信ぜらるゝ記録により、何年何月何日何の某何歳にて斯云の事より遂に縊死の最期を遂げたりとの證を得て、再び抜くべからざる觀念を作れり、若し之の人に一種の恐怖心を惹起せんか、此の家に住む時は一生の禍ひとなるべし、之れ其恐怖すべき強き觀念は生理的に實現し來る可きが故なり、
更に一例を以て靈示の理解し易きやう試みん、

此に一人足に疼痛を覺へ歩行困難にして惱める人あり之の人に對し、汝の足は疼くなじと命令するとも何等効なく、寧ろ滑稽に了らん、是れ第一の如し、足痛の人には全く何事なるや要領を得ず、寧ろ人を馬鹿にせるものとの反對觀念を起し或は無常識者よと批難せん。

然れども人間心理の説明を爲し、斯くすれば如何にも癒し得べしと信ぜしむる理由を知らしめば、疑ひなきのみならず治療を希望するに至る、之れ第二なり。

而して彼の精神統一をなさしめ若くは誘導して一喝感應せしめば、最早や汝の足は疼痛なく自由自在に屈伸運動も出来れば、走り見よと命ずれば其人忽然として疼痛何れにか去り、歩行困難何れに失せて全治し起居動作屈伸自在にして、走り且つ歩行を試すも何等の障害を感ぜず全治したり、之れ第三なり。

甲者の靈示は乙者に受容せられ、直に心理的より生理的作用を惹き起し自働的にその靈示は乙者を支配したるなり。

第三節

靈示の目的

人の生活中肉體より精神を支配することよりも精神より肉體を支配する所の勢力は遙かに有力なり、即ち精神は身體を左右し變化せしむる所の一大潜勢力なり、實に靈示なるものは此の一大潜勢力を左右し得る感化偉力を有するものにして、靈示直接の目的は何ぞやと言はゞ、其人の潜勢力を誘導し其人の精神を左右するに在り、その潜勢力の精神を左右するは何の目的なりやと言はゞ、即ち其人の身體の機能を左右せんとするにあり、故にその精神を左右し新觀念を惹起するは、靈示直接の目的にて身體の機能を制促せんとする目的を達せんがためなり。

例へば或る乳汁不足の人を治療せんに、靈示の應用を求むるとせば其の乳汁分泌を増加せしむべく、分泌機能を促進せしむるは靈示應用の目的なり、其の全治することは生理的作用なるが、其作用を誘起せしむるは精神作用なり、換言すれば豫期の觀念にして之の觀念に基き運動神經より生理

的作用を起し、機能を促進せしむるが故に乳汁不足は増加促進して全治するに至るものなり、即ち原因は觀念が中心となりて働くものなれば、此の觀念は即ち靈示の結果に因りて惹起したるものなり。

更に靈示の目的を切言すれば、所期する中心觀念を誘起するにあり、此の如く靈示の目的は豫定の觀念を生起せしむるものなれば、其の目的を中心として與へざる可らず、故に其目的を達せんがために、總ての方面より觀察して適當なる方法を講ずべきを最も必要の事となす。

靈示の目的は斯の如く一定の精神的觀念を誘起せしむるにあれば、言語動作、有形無形を問はず如何なる方法にても若し此の目的を達することを得るものなれば、悉く「靈示」と稱する事を得べし、されば言語、行爲、境遇、太陽、月、山、海等宇宙の對象物之れ皆、或る人々には靈示となるものなり。

第四節

靈示の區別

靈示とは、感受する人により時期により、又靈示を與ふる人により、靈示を與ふる方法により或は靈示の結果により區別するを便利とす。世人の多くは靈示と言へば醒覺時催眠時を以て標準となすも、本會は催眠術の状態を取らずして、可感不感の精神状態によりて之を區別す、

即ち不感時の靈示は 間接論理的靈示程奏效し易し

可感時の靈示は 直接的靈示程奏效し易し

自己靈示と依他靈示

自己靈示は一名自動靈示と言ひ、依他靈示は一名他動靈示と云ふ。

人は實に複雑にして無數なる觀念を有し限定し得らるべきものにあらず、此等觀念の力は常に吾人の身體及び精神を支配しつゝあり、歌に「思めば思む思まれば思ます思むと云ふ文字は己の心なりけり」と言ひ又「心から心に物を思はする身を苦しむる我身なりけり」と云ふ又俗に「人は氣から病を生ず」と言ふ、此れ皆觀念は身體を支配するてふ一大眞理を證明するものなり。

或る人は夕立の來るべきを能く知れり、何故なるやと言ふに正に夕立の

來らんとする氣温に感ずるや、必らず頭痛を覺ゆる信念あり、故に頭痛を覺ゆれば今日は必ず夕立來るべしと、果して夕立來りてまた違はず、斯の如く或る特別なる場合に特別なる觀念を誘起し其人を支配する場合極めて多しとす、此の如きものを自己靈示と稱す、換言せば自分が自身に靈示を與へる時に之を自己靈示と言ふ。

又教育家が子女に教訓し、醫師が患者に向ひ種々注意と慰藉とを與へ、或は術者が被術者に靈示を與ふるが如く、靈示を與ふるものと靈示を與へらるゝものと人を異にする時は、之を依他靈示と稱するなり。

第五節

靈示の直接と間接の別

甲者が乙者に向ひ「立ちて呉れ」と靈示すれば、乙者は直ちに立ちて甲者の前に行けり、又「汝は人の前にて頭を掻く癖あり、甚だ見苦し、爾今止めよ」と靈示すれば、爾後頭を掻く癖を直せり。

齒の痛む人に「癒つたモウ痛まぬ」と靈示すれば、即ち疼痛治せり。

袖の角或は襟を噛む癖ある子供に向ひ「噛む事勿れ」と靈示すれば、即ち治せり。

此等は直接に與へたるものにて、遠廻し又は婉曲なるものにあらず、即ち此種の靈示を直接靈示と稱す。

又何々せよ、斯くせよと明白に言明せざるも、或は物體によりて或は動作によりて、乙者に向ひ暗冥の裡に何々を爲せよと、靈示することあり、乙者に對し筋肉壓迫をなす時一撃を加ふるが如し、其後一撃を加ふると同時に筋肉壓迫を起すものなり、又甲者が乙者に手を以て眼を閉づべく動作により示す時は、言語を用ゐずとも眼を閉づる時は其後此の同一合圖により常に眼を閉づるに至る、此れ乙者に於て斯くせらるれば斯くなるものとの觀念に支配せらるゝが故なり、此等の靈示を間接靈示と稱す。

第六節

靈示と聯合作用

乙者に對し「汝の手は動かぬ」と靈示して、最早や乙者に於て自由運動

を爲し得ざるのみならず反抗をも許さず、寧ろ従順に靈示を實行したり、次に「汝の手は膝に着き離れず」と靈示せしに其如くなれり、又喫煙癖の人に對し「汝は煙草は嫌ひになれり」と靈示して、試みに煙草を薦めしに、今迄好める煙草を喫する能はず、之を嫌ふに至れり、「汝は予が三回拍手すれば、予に向ひ三回頭禮すべし」と靈示して、應て拍手三回すれば、彼は予に三回頭禮せり、又豫め排尿せしめて後「汝今尿意を催せり」と靈示すれば、約五分を経るや彼は尿意禁ずる能はずして便所に行けり。

此等は靈示の直ちに實現したる完全なる例にして、斯る直接の結果を生じたる場合と、靈示の直接結果と稱すべし。

又靈示は感受せるも、その靈示通り直に實行せず靈示に類似したる現象を起し、又聯想作用に依り接近したる現象を呈することあり、例へば「君は今蝶を見る」と靈示せしに、彼は蝶を見ずして鳥を見たり、「汝は今兎を見る」と靈示せしに、彼は兎を見ずして犬を見たり「君は机上の新聞を読むべし」と靈示したるに、彼は新聞を讀まずして側にありし書籍を手にしたり、斯の如く靈示の内容を明確實現せずして類似の現象を起すことあり、

之は乙者の觀念の聯合の作用に起因するものにて、京都の豆腐屋の喇叭を聞きて豆腐屋と思ふは確なれども、田舎の乗合馬車の喇叭と同一の音なれば、此の喇叭の音は乗合馬車なりと思ふは靈示せらるゝ者の聯合作用により、人は常に必ずしも靈示せられたる事柄のみを實現せず、往々斯の如く靈示に類似接近したる現象を起し、或る時は全く靈示と反對の事柄を實現することあり、斯る現象を誘起せしむるは靈示の不十分不完全なるがためにあらずして、乙者の聯合作用の結果なれば靈示を應用する者の殊に注意すべき事となす、此等の場合を間接結果と稱すべし。

靈示は乙者の感神經に刺戟を與へて觀念に到達し、觀念中の尤も近き觀念に聯合せられ、之を動神經に傳へて肉體の活動として顯はるゝものなれば、同一の靈示にても感受者の觀念聯合及び觀念の要素により現象を異にせるは免るべからざる所なり。

第二章

第一節

靈は實體に
なり
靈は現象
なり
靈示は應用に
して靈妙は技
術なり

凡そ心理現象の應用及び實驗研究に於ては、靈示ありて始めて成立せらるべきものにて、人と人との關係殊に人心内部の交渉は靈示作用なくして存在するものにあらず、靈妙術は靈示を基礎とするものにて、靈示を抜けば靈妙術は形骸となり何事も行ふ能はず、然れば靈示は靈妙學術上精神治療上の生命なりと言ふべし。

即ち靈示ありて靈感せしむる事も、感應せしむる事も爲し得られ、又靈示ありて精神現象も無害安全になすことも爲し得らるゝなり。

吾人之の靈示を巧みに應用して人性の性能を左右し、人格の修養、品性の鍛鍊其他處世上、商業上、日用百般の事業に應用して、大なる目的を達することを得るなり、此等は皆靈示の利用により行はるゝものにて、實に運用の如何は成敗の分岐點なれば、就中精神治療者は此の靈示運用の巧拙により、成效し失敗するものと斷言するを得べし。

然らば靈示の利用如何に就きて研究することは、靈示應用者に取りて極

めて重要な問題なること論を俟たず、然り如何なる靈示が最も効果多きか、其運用法の要點を講述せん。

靈示をして最も有效ならしめんと欲せば、常に被術者の精神状態、感受性の強弱程度如何なるや、感應状態は如何なる程度まで進み居るや等を觀破し推知すること最も肝要なり、如何となれば乙者の精神状態に順應する、靈示を選択するは被術者の感受作用の状態を判別するの要あるがためなり、今一人の被術者に幻影を現出せしめんとするに當り、被術者の精神状態は豫定の幻影を惹起するに適するや否やを觀破せざれば、此の錯覺を確實に現はすこと難し、即ち被術者の心理状態にして錯覺を起すに不適當なる程度なれば、適當なる状態にまで感受性を誘導するか、又は中止せざるべからず、若し心理状態に不適合なる靈示を與へんか、何等の作用をも惹起せしむること能はず一場の滑稽に了らんのみ。

即ち未だ幻影錯覺を誘起するに至らざる状態なるに係らず、誤りて之に幻影錯覺の靈示既に容易なりと信じ、坐蒲團を巻き「之は花子と云ふ汝の子供なり暫く抱かれよ」と靈示したるに、被術者は「之は子供にあらず坐

蒲團なり」と答ふれば如何ん。

此れ大なる失敗にして其原因は感應の程度を誤認したるによる、故に望む所の靈示を與へんとせば、必ず其の靈示の感受し得らるゝや否やの心理状態を検査判定するを要務となす、度に適する靈示を撰定すること第一なり。

第二節

可能靈示の撰定

感應に對し被術者の心理状態がよき程度に進み居り、靈示感受性が好都合に充進し居るを觀取したれば、可能なる範圍内に於て適當なる靈示を與ふるに非ざれば、靈示は確實に奏効するものにあらざる事を記憶せざるべからず、總て感受性の状態に應ずること、可能なるや不可能なるやとを考へ區別せざる可らず、例へば疼痛無感の状態を必要とする場合、單に不隨意状態の程度なる事を知らば未だ疼痛無感の靈示は感應せざるものなれば、必要の状態にまで誘導せざる可らず、換言すれば被術者の靈示感受性の範圍は未だ靈示の域に達せざるものなり、故に靈示は精神状態に適當なる程

度のものを用ゐ、漸次豫定の感受性を發動せしむるやう誘導し、常に靈示の感應範圍を出でざるやう注意して靈示を構成することを留意すべし。

第三節

自己靈示の開發

靈示は被術者の自己靈示を昂進せしめ、之を利用することを努むべし、被術者の精神状態は常に何等かの靈示に感ずべき性質を有するものなれば、術者たる者は之の感性を成るべく彼自身に於て目的とする自己靈示を増進せしむる工夫をなすべし、換言すれば靈示の目的は被術者の心中に存在せる自己靈示を強大ならしむるにありと言ふを得べし、即ち治療靈示を與ふることは其の人の中心となれる病的自己靈示を打破して、之を退け他の健全なる觀念を中心となさしむる強き自己靈示を與ふるにあり、是れが靈示應用の眞の目的とす、故に術者たる者宜しく此の道理を攻窮し、如何なる觀念が其人を支配し居るやを觀破して之を打ち破り、觀念の中心點より除外し、他の健全なる觀念を惹起せしめ、或は自分は健全にして病氣にあら

ずと云ふ強大なる自己靈示を活動せしめて、病的自己靈示と位置を轉せしむることを要す。

第四節

靈示は明瞭なれ

靈示を與ふるに其方法如何を問はず、最も有効ならしめんとせば、必ず明瞭ならざる可らず、言語靈示が不明なれば其靈示の結果は確實なる奏効を見ること能はず、然れども被術者の自己靈示にして、既に豫定の目的に向ひ増進しつゝあるものには、又必ずしも言語靈示の明瞭を要せず、寧ろ明瞭ならざるを必要とする事あり、例へば加持祈禱の如く意味の明ならざるを有効とするものあり、其の口に唱する呪語の意味は一の神秘的のものなるも、音聲口調を以て有難き者と思はしむるも明瞭ならざるものなり、然れども最も普通の場合に於て言語を以て與ふべきものは明瞭を要すると言ふまでもなし。

第五節

思想は確なれ

靈示を明瞭ならしめむには其要素となるべき思想を明晰ならしめざる可らず、思想にして曖昧模糊ならんか組織する所の靈示の意義も從つて曖昧となる理なり、されば先づ靈示構成に必要な思想を明確にすることは、又重要な事なり、例へば神経痛患者を治療せんとするに當り、術者は先づ如何なる靈示を組織すべきか豫め一定の思想より靈示の要點を定めざる可らず。

第六節

思想發表表

思想の原泉明瞭なるも、之を言語に發表せんとして不明瞭なる言語を以てすれば、其は甚だ不明瞭なるを免れず、世には自己の抱懐せる思想を十分に發表すること能はざる人極めて尠からず、此等の人にして言語靈示の

應用家たらんとするは其成功甚だ困難ならん、然れども明瞭なる思想を有する者は何等かの方法を以て之を應用すること難からず、彼の禁厭、靈符の如きものに代へて之を應用し偉大なる効を收むる者あり、深く注意すべし。

第七節

用語は明瞭なれ

加持祈禱若しくは呪文秘語の如く用語の意味明瞭ならざる事も又必要なることあり、然れども言語の用法を明瞭にするは普通靈示の應用に重要なれば、此點に注意を拂ふべきなり。

即ち施術の靈示は、前後錯雜せざること目的靈示と試験靈示（誘導靈示）とを混同せざる様注意すべし、例へば神経痛を治療せんとせば、靈示は確實に強く患者の心中に「神経痛は癒つた」と印刻せしめざる可らず。

靈示を與ふる言語は勢力を有するものならざる可らず、言語軟弱にては徹底感應せしむること不可能なれば、充分の重味を付け威嚴ある言語にて

「君の痛みは全く癒つた」と嚴然と靈示すること最も必要なりとす。

靈示をして被術者によく理解せしむる様、即ち意味のよく通ずる様言語を使用せざる可らず、言語のみ如何に明瞭なりとするも被術者の心裡に理解し得ざる言語は、何等の作用も惹起すること能はざるべし。例へば、

無教育なる膝關節疼痛を訴ふる患者に向ひ「汝の膝關節疼痛は癒つた」の如く、幾回反覆するも依然として變化を現さず、而し此の被術者の感應状態は靈示を感受するに充分なれども、何故感作を起さざるやと不審に思ひ後にて聞き糾せば、膝關節疼痛とは全く何の事なるや、意味を了解せざりし事を發見せり、即ち膝關節疼痛とは何の事なるや理解し得ざりしに因り、術者たるもの能く靈示の意義を被術者に解せしむる事に留意すべきなり

靈示の言語は簡短にして正しく直に其要領を得るものならざる可らず、靈示複雑なれば理解に困難を感ず、故に成るべく單純にして要を盡す事に努めざる可らず。

靈示の言語は階段を昇るが如く秩序正しくすべし、前後錯雜したる靈示、

轉倒したる靈示は意味不明瞭なるために効を奏すること少し、故に必ず順序を立て、要領を得せしめざる可らず。

第八節

奏効顯著の靈示

感應状態昂進の度強き時、即ち靈示感受性の鋭敏なる時靈示は直接なる程實現顯著なり、之に反して靈示感受性昂進せるに間接靈示なる程奏効弱きものなり。

故に感受者には成る可く簡短明瞭直接なるを尊ぶ、例へば「君の頭痛は今全治した」と單刀直入的に與へ、緩急其度を失して被術者の精神を動かし、種々の觀念を起さしめざる様心掛くべし。

第九節

靈示は積極なれ

禁止的なるよりも誘導啓發的なるを効多しとす「痛くない」と云ふより

も「癒つた」と、靈示する方有効なり「君は煙草を喫むな」と靈示するよりも「君は有害無益なる煙草を喫まなくなつた」と靈示する方有効なり。

第十節

靈示は斷定するを要す

然れども靈示と實現と範圍との差異をよく觀察して、其可否を決し然る後斷定的靈示を施すべし、若しも「君の神経痛は多分癒るならん」など、判然せぬ意味を含まば、靈示は充分の効果を奏すること能はず、故に思ひ切つて反對を許さざるが如き宣言的語調を以て、斷定的に與へる事が成功の秘訣と知るべし。

靈示は現在のなれ

又一大秘訣は現在のなるにあり「今に」にあらずして「今」である。「追々に全治する」にあらずして「今全治せり」と、權威を以て威壓するが如く可能の範圍に於て現在の命令的であり。

第十一節

靈示は秩序的なれ

何事によらず秩序を整へ、易きものより順次難きものへ進むを要す、殊に靈示應用上此の順序を誤らざる事は成功の秘訣なり、若し靈示家にして之の秩序を亂さんか奏効すべき筈の靈示が何等の現象をも起さずして失敗に終るべし、殊に精神作用を利用せんとする者は其成敗の著しきを知るべし、故に如何なる場合にも實現し得らるべき見込みの靈示より始め、次第次第に目的の方向に誘導すること恰も階段を昇るが如くすること尤も大切なり、精神状態に不適當なる靈示を與ふるは倚癖にして常道を逸したるものと云ふべし。

第十二節

靈示は各方面より

人の觀念なるものは各人により聯合作用を異にすれば或る一定の觀念を

惹起せんには各方面より靈示し、大體に於て略同一の觀念を喚起せしむるを得べし、之れ最も大切なる事なり、例へば神経痛を治療するに唯言語靈示にて「君の神経痛は全治したり」と言ふのみならず、其患部を手にて撫擦すること、震動を與ふること、電氣を用ゆること等其他無害にして比較的強き刺戟を與ふる事は、尤も重要な靈示法なり、言語、撫擦、震動、電氣等何れの方法も神経痛は之れにて治せりとの略同一の觀念を惹起せしめたり、故に一の目的を達するがために各種の方面より、靈示を施すは又靈示應用の秘訣なり。

第十三節

靈示は繰り返すこと

中心觀念となりし強き靈示は反覆を要せずと雖も、通常の場合は一回の靈示よりも二回三回をよしとするが如く、回を重ねる毎に自己靈示は強くなり行くものなれば、靈示をして深刻ならしめんには其の靈示を反覆することを要す、幾回反覆するも差支なし、只同一言語を繰返して被術者をし

て「ア、煩さい」と思はしめざる事に意を留むべし。

四十

第十四節

靈示秘訣の結論

靈示の感應する程度は、靈示の程度と感性の程度とにより一概に論ずるを得ず、之を極端に論ずる時は靈示の力は絶対に觀念を左右する力を有するものなれども、通常靈示の利用せらるべき範圍は自然限定せられたるが如く、世の靈示の結果にして特殊の實例少からざるも、斯の如きは必ずしも同一の結果を豫定通りに惹起することは甚だ困難なり、故に靈示感性が如何に強く昂進せる時と雖も、被術者の理性、信仰、性質、良心等は一定の準備を有し、之に反對なる事柄を靈示することあるも多くの場合に於て感受鈍く、若しくは全く感ぜざる事多し二と三とを加へて七なりとか、基督信者に稻荷の憑據を信ぜよとか、或は温良の人に亂暴なれとか、或は正直なる人に盜みを働かせんが如きは、感受し難きものなり、要するに不當なる靈示は感受者の品性と反比例をなすものなり、理性の發達鈍き者は

二と三とを合して七となる事も信ぜん、薄信の徒なれば忽ち稻荷の憑據をも信ぜずべし、温順の假面を装ふも其實粗暴の者なれば亂暴をも演ずべし、眞に正直ならざる人は盜みをもなすべし。

又婦人に向ひ裸體になるべしとの靈示を反覆するとも、其婦人にして謹慎なる婦人なれば決して此の靈示に服従するものにあらず、然るに無節操なる婦人なれば忽ち其靈示を感受して直に裸體となるべし、斯の如くなれば不品行、不條理の行爲は先づ靈示の力を利用せんとするも容易に行はれざるものなり。

然らば通常靈示せんとする時は本人の意志に反せざる寧ろ適合するやう考へざる可らず、被術者の希望する所のものほど奏効顯著なるは理の然らしむる所なり。

第三章

靈示と現象の關係

第一節

序 說

靈示なるもの、目的は心象中の或る物を喚起するにあり、觀念中の或る一つが生起すれば必然の結果として聯合作用により、次の觀念より順次他の觀念を誘發し所定の目的を達せしむるに至るものなり。

又觀念なるものは動神經を通し筋肉の運動を生起せしめ、諸種の運動作用を起すものなれば靈示したる、結果は觀念を喚起し、其觀念は心理的生理的作用を誘發して、必らず生ずべき諸種の運動現象を呈するは理の明なる所なり。

第二節

靈示と心的現象

總て靈示に感ずる者の觀念は多くの場合常に歸一され居るものなり、從つて運動に於ても止動的なるか或は精神的に無意識なるべき筈なり。

人の觀念の沈靜となれる時は其人の呼吸は其數を減じて深くなり、脈膊も其數を減じて強實となり、兩者共に整調となるものなり。

靈示に感じつゝある者は其靈示物の方面に注意を向くるがため、他の事を聽き如何に面白き事柄も強き反應を起さざるは普通の現象と云ふべし、靈示感應中は限定せられたる範圍にては感覺鋭敏なるも、其餘の事に對しては殆んど反應せず或は全く感ぜざるべし。

靈示感應中は眼は開きたるまゝの者あり、殊更眼を見張る者あり、半開半閉にする者あり、又眼球を上方に向はす者あり、眼を閉づる前眼瞼の震動する者あり、眼を閉ぢたる後顫振する者あり、遷回運動をなす者あり、全く靜止する者等種々あるも之れ其の素質に原因する者なり。

口にも特種の現象を呈する事あり、笑ふが如き者あり、(筆者も嘗て共に笑ひし事あり)唇の半開半閉の者あり、呆然怠開せる者等あれども、感應強き時は多くは筋肉は緊張せざるを常とす。

靈示感應中は注意凝集の結果、總て許されたる運動を行ふも禁じられたる運動は行ふ事能はず、解禁自由になす事を得、例へば

書や畫を書く事は出来るも、其他は自由にならぬ又嘔、噫、嘔、咳嗽、涕泣、笑等を容易く發せしめ、又能く自由に停止するを得るなり。

又連続したる運動をなさしむるに、手先を左右に振らしめて時計の振子なりと云へば何時までも繼續す、頭を左右に振らしめ、口を開閉せしめ、圓形に歩行せしむる運動の如き是なり。

又時に靈示感應と共に各自の持病を併發する事あり注意すべし、又稀には昏睡的狀態になるものあり、昏睡的狀態となりたる者は熟睡せる者の如く、筋肉は弛緩し頭は垂れ、身體は力を失ひ、屹立せる者は倒れ、椅子に凭る者は時に落ちんとする事あり、斯の如き状態は靈示に感應せずと言ふ者あれども、外見上昏睡的狀態にして尙よく感受性の働く者あり、全然靈示に感應する事なくば靈示に縁なき者にして靈妙術に關係なき者なり、然れども靈示感應性の鈍れる者にして幾分か靈示を受容する者あれば、鋭敏なる觀察を下すべし。

靈示感應中は記憶なきもの、如く思惟する者あるも、之れ甚だしき誤謬にして靈示により記憶を意識せしめざる事を得ることあり、又働く觀念の

第三節

靈示と生理現象

みを意識内に擴大して他の記憶と隔離せる状態に置くことを得るも、又却つて靈示より聯合作用を起し古き記憶を喚起することあり。

例へば、嘗て或る人突然盜賊に罹りし事を詳しく事實として述べ發狂人かと疑ひしに、さにあらず三十年前の事を明瞭に喚起したる事を發見せり。又自分の姓名を忘れしめ、或る字を忘れしむるが如し、靈示感應中は平時よりも記憶鋭敏なるを普通とす。

第四節

靈示と隨意筋の運動

靈示感應の最も高潮し最も正確に現象を惹起し得る時に當り、最も精鍊せられたる適當なる靈示を附與する時は、生理的現象として其作用の最も顯著なる現象を誘發し得るものなり、吾人の常に神變不可思議とする人身に於ける現象は皆此の理によりて發現するものなり。

靈示は隨意筋の運動を支配し得、例へば「汝の眼は開かぬ」と言へばドウシテも開く事が出来ぬ、「汝の手は物を握ること能はず」と言へば、如何に握らんとするも握る事を得ず、左右何れの手にても伸させ「汝の其手は曲らぬ」と言へば、如何に力むるも曲げ能はず、又歩行せしめ突然「其足は動かぬ」と言へば、モ一歩む事は出来ぬ」と靈示すれば、動かす事も歩む事も出来ぬ、斯くの如く四肢五體の有爲運動を左右し、隨意筋を制止する事が出来る、故に之の禁解の作用を利用して諸種の身心現象を作爲し、或は疾病を治療する事を得るなり。

第五節

靈示と不隨意筋

右の如く隨意筋の運動が一言一擧の靈示により左右せらるゝ如く、不隨意運動も又自由にすることを得、例へば腸の蠕動運動をして左右し便通を自在にし、或は心臓の運動を遅速せしめ、従つて血行脈搏等を左右することを得るは容易なる事實なり、靈示の感應強き時は胃腸の運動を最も左右

し易きものとす、空腹の時も今食事を爲して満腹なりとの靈示を與ふれば、事實食したるものと信じて満腹を感じ、又之と反對に食後直ちに今空腹にして食慾を促がす靈示を與ふれば、平氣に再び食を攝るに至る。

腸にしても下劑を服用したる人に「君の服用したる下劑は容易に利かぬ」と靈示すれば、四時間にして利くべき者が七時間八時間を経て始めて漸く利くが如く、之を利用して便秘癖の人に「毎朝床を起き出づると間もなく便意を催ほして快通する」と靈示すれば、其の如くなりて常習便秘は全治するものなり、又此の理にて下痢症を制止することも出来、便通の不規律なることも靈示のみを用ゐて容易に整調ならしむる事を得るなり。

第六節

靈示と模擬活動

諺に曰く朱に交れば赤くなる、母親の小供に口を開かしめんとする時未だ言語を以てすること能はざるも、母自分口を開き示せば小兒も同じく口を開き、又小兒中には其身振り話振り等其母によく似たるものあり、又長

男長女の一言一行は悉く次に生れたる子の眞似をなす、即ち摸擬する事は人のよく知る所なり、之れ摸擬作用の人心に及ばず自然の力にして、此の作用は教育、感化、精神技術の上に一大原理を示すものなり。

此れは靈妙状態中特に現はるゝ徴候にして被術者が頻りに術者の眞似をなす事なり、之れも要は靈示の結果なること忘る可からず、初め術者の眼を見詰め被術者にも亦術者の眼を見詰めしめ、或は靈妙状態中のものに眼を開かせ互に見詰め合ふもよし、漸次靈示者の觀念を被靈示者に感應し來るに従ひ術者の眞似をなすに至る、術者手を舉ぐれば被術者も手を舉げ、術者口を開けば被術者も同じく口を開く一舉一動術者の爲すが儘に従ふ、若し術者が被術者の視界より離れて見えざるに至れば摸擬作用は中止す、術者再び視界に現はるれば被術者は再び眞似をなす、其運動は術者の支配下にありて自己と云ふものは全く没したる如くに見ゆるも、被術者が術者の視線を見詰むるため術者の觀念が被術者に能く徹底せる結果にして、術者の運動の觀念が一々被術者の腦裡に映寫するが故に、觀念は其通の運動を惹起するものなり。

第七節

靈示と止動

止動状態も亦靈示威應中に起る一の現象なり、感應者の手を高く舉ぐれば何時までも其位置を保ちて、その儘下らず動かす別に言語を以て靈示を與ふる必要なく、又曲げて置く時は決して伸びず、斯の如く唯に手のみならず頭にも、頸にも、脚にも全身悉く皆術者の爲すが儘となるべし、恰も鉛にて作りし人形の如くなり、是の現象を止動状態と稱す。

此の止動状態も亦暗黙の間に行はるゝ一種の靈示の結果に外ならず、決して自然に顯はるゝ現象にあらずして筋肉感覺を通じて與へたる靈示現象なり。

第八節

靈示と緊張状態

此の如く全身恰も棒の如く眞直に硬くなり、如何にするも屈曲すること

能はざらしむ、人間を此状態にして頭と足とを何かの臺の上に仰向に載せる時は、人の橋が出来たる之を緊張状態といふ。其の完全なる場合には約二十貫の重量に堪ふるものなり、故に人が其上を渡るも、腰を掛くるも、又重き物を載するも少しも曲ることなし、實に面白き現象なり、此の緊張状態は全身の筋肉が充分強く緊收する結果なれば、前に述べたる止動状態は一部の随意筋の緊收に因るものなるも、緊張状態は單に言語の靈示のみにて惹起せしむること餘程困難なり、此の状態を生ずるにはメスマルの方法が最も適したるものなり、然し感應の度深ければ深き程自由自在に其現象を呈せしむることを得るなり。

第九節

靈示と幻影、錯覺

幻影及び錯覺は吾人生活中最も神妙不可思議に感ぜらるゝ一現象なり、今靈示感應の人に一言の靈示を與ふるは、如何なる幻影にても、錯覺にても催起せしむる事を得るなり。幻影とは無い物を現在在るが如くに思はし

むるものにて、例へば「君の弟君は今君の傍に立ち居る」と告ぐれば誰も居らざるに、現に其弟君が居るが如くに見えるなり、又實際聲もなきに現に音聲が聞ゆるが如く、即ち弟が側に居るといふ觀念を惹起して被術者の眼には事實として見得るなり、「今弟君は喜ばしげに何か君に物語りつゝあり」と告ぐれば、弟の聲は明に之を聞くべし、此等を幻影と稱して事實外界は虚無なるに拘はらず物があると思ひ、又何等の音響も無きに現在物音を聞けりと信ず。

又錯覺と言ふは何か外感を刺戟するものある時、其れを全く間違へて知覺することにて、例へば月夜木の小群などを人と思ひ、サイダーを酒と信じて酔ふが如く、物を叩きながら「琴の音が聞える」と云へば、實際琴を聞きつゝあるものと信づるが如く、同じ響きにても「兵士の演習せる銃聲なり」と言へば、又然か思ふ、又座蒲團を卷きて與へ「之れは汝の愛子なり」と言へば、如何にも可愛げに抱き上ぐるが如き、之れ等を錯覺と云ふ、之れと同様に嗅覺にても、味覺にても、觸覺にても、壓感、温感、疼痛感、痒感等全く幻惑することを得るなり。

外感の幻影又は錯覺は如何なる方法に依るも現出す、例へば「鳥が見える」と唯一言靈示するのみにて靈感者には實際鳥が見え、又手眞似を以て蝶の飛ぶ容子を示すも同一の結果を得、殊に屢々感應したる者には極めて容易にして、言語にても、手眞似にても、靈感者に靈示の意味を理解せしむればそれにて發現するなり。

以上を積極的の幻影と言ふことも不可ならず、されば之に對する消極的の覺の一例を擧げん。

被感者に「君は机上の時計のみを見る事を得るもその他の物を見る能はず」と云へば、人も何も時計以外のものは一切見ること能はず、又衆人中に「茲に居るは君と予と二人のみにて他はこゝに居ない」と云へば、一同其處に居るに拘らず知覺すること能はず、即ち被感者の感覺作用は全く停止することを得。

總て幻影錯覺は被感者にしか確信せしめる事にて、全く精神作用なり。

第十節

靈示と感覺の銳鈍

靈感者の感覺は注意の範圍に於けば非常に鋭敏となり、常人の感別し能はざるものを明かに感別する迄に進む。

視力 人により異れども不透明なる厚紙を透して品物を見分け、顯微鏡を用ゐざれば到底見ること能はざる細胞を見たることあり、或は出水の時濁水に溺死して水底の杭にかゝれる者を發見したることあり
聽力 千里耳の如くヒステリー患者の或る者の如く、聽覺機微の高潮したる時一里餘を距りたる所にて相談したる事を明かに聞き取りたることあり。

味覺 調理によりて形態性質も變化したる肉類を食して、之れは鳩なり、之は鶴なり、之は鹿なり、之は兎なり、之は鱒なり、之は鮭なりと識別し、之の茶は如何なる土質に植えられ、如何なる肥料を施し、如何なる性質の人によりて製せられたるかを知るが如し。

嗅覺 假りに十人の煙管を一束となし、嗅覺によりて此の煙管の嗅は此の人の手の嗅ひと嗅ぎ合せて悉く感別することを得。

觸覺 盲人の指頭によりて色を識別し、針に糸を通ずるが如き實例少からず。

壓感 盲人の空氣の反動により物體の形狀位置を知り、市街の形狀廣狹を知るが如し。

暗中歩行して物に接すれば異様の感覺により之を知る。

溫感 製糸専門の技術者は手指を以て湯の溫度を知る事、不完全なる寒暖計よりも確實なり。

或る人は氣溫の變化をだも能く感じ、晴雨寒濕計の如き作用を爲すものなり、

此の如く常人常態に於ても注意を集中せる人には、自然的機能の昂進せる者あり、被感者には總て感覺を鋭敏にすることも又遲鈍ならしむること自由に爲し得るは理の略易き所なり。

第十一節

靈示と情感

情感は普通感覺
有機能感
とも云ふ

情感は身體一般の状態又一部の機關の状態より起る感覺にして、疲勞とか、空腹とか、腹痛とか、沈鬱とか、不快とか、快潤とか、色慾とか、戀愛とか、憎惡、喜怒、恐怖、物の好き嫌ひ等の感覺を總稱して言ふ。

靈示は此等の感覺を自由に左右し、著しく變化せしむることを得るなり。例へば、食慾缺乏の患者をして「君は頻りに空腹を感じて居る」と云へば、直ちに空腹を感じて食慾を起す、又之れと同じく渴を感じしむることを得、又疲れたる人に「疲勞はなくなつた」と云へば、少しも疲勞を感じざるに至る、酒癖者に「酒は全く嫌いになつた」と靈示すれば、酒は全く嫌ひとなりて飲む能はざるに至る、又「君は充分飲食をした」と靈示すれば、或る程度まで飢渴に堪え得るものなり。又「君の眼は見えなくなつた」と靈示すれば、明き盲の如く何物も見ること能はず、「聞けなくなつた」と靈示すれば、聾の如く如何に其人の姓名を呼ぶとも更ら

に答へず、「口がきけぬ」と靈示すれば、嘔者の如く言語を發すること能はざる状態となすことを得るなり、又アンモニアを嗅がするも悪嗅を感ぜず、又被感者の手を撫で「君の手は少しも痛みを感じなくなつた」と靈示すれば、針を以て其手を刺し通しても何等の疼痛を感ぜず平然たる有様なり。

第十二節

靈示安産法

靈示法にては悪阻の苦痛を救ひ、早産、流産の習癖を矯正し、分娩時の苦痛を免れしめ、産後経過をして速かならしむる杯の効果の大なる事は、實に驚くべきものなり。

或る場合には妊娠を左右し得ることあるは事實に徴して明白にして、今日まで何等の不妊症と認むべき理由なくして妊娠せざりし者が、靈示應用の結果妊娠せし者其數枚擧するに遑あらず。

此等の作用を利用して諸種の疼痛の甚だしき患者をして「君の疼痛は全

く去りてモ一如何にしても痛まぬ」と靈示すれば、全く無感覺になり外科手術を施すことも出来、又無痛に分娩せしむることも出来る、産婦には豫め數回施術し置き感性を強めて、既に陣痛始まり疼痛も次第に烈しくなりたる時之に靈示して「少しも疼痛苦悶もなく極めて安静に睡眠して分娩する事が出来る」と云へば、子宮收縮には毫も障害を來すことなく、疼痛苦悶なく安全に分娩せしむることを得るなり、靈示感性にして強ければ如何に激烈なる疼痛をも、全く無感覺の状態にするを得るものなり。又有機感覺と密接に關係せる精神状態あり、即ち快活とか、沈鬱とか、快惱とか、云ふ心の調子は皆此感覺と關係せるものなれば、此の精神状態も亦た靈示に依りて如何様にも變化せしむることは容易なること、す。

殊に分娩時の疼痛を去り、無痛に分娩せしむることの事實なることは、近世の最大進歩にて婦人の爲には一大福音と稱するも決して過言にあらざるなり、分娩時の總ての疼痛を感ぜざるに至らしむることを得。故に醫術上流産せしむる必要を生じたる時は、服藥其他の方法に據らず單に靈示の力を以て流産せしむることは妙ならずや。

第十三節

靈示と分泌

涙、汗、唾液、乳、尿、精液等の如き分泌作用も、靈示により大に變化を與へ増減せしむることを得、故に乳汁不足の母に乳量を多く得せしめ、寢小便をなすものを平癒せしめ、又胃腸の分泌液過多若しくは不足より生ずる種々の疾患を憂ふる者として其増減を調節して、此等の疾病の平癒を計ることを得るなり。

細菌學者より見れば、吾人の世界は細菌を以て充たされたるの感ありて、身體虛弱なるもの若しくは病菌細菌を恐怖する者は往々此等菌類の爲に惱まざる者あり、然しながら強健なるものは抵抗力強大なるため、常に細菌を殲滅せしむる機能盛なるが故に何等の害だも受けることなし、之は悪疫流行時に際して屢々好實例を見る、靈妙作用は直接細菌を殺菌する力を有せざるも、間接には非常なる威力を有し殺菌劑同様の効果を收むるのみならず、體內にて殺菌劑を用ふる能はざる所にも靈妙作用を及ぼし、身體

組織の細胞を強盛にして生活上有害なる菌類を征服して安全ならしむる力を有す。

第十四節

靈示と組織變化

靈示の力により身體組織に變化を起すことを得るなり、觀念の變化は肉體的變化を伴ふは恐らく疑ひなかるべし、されど現象の微弱なる者は之を認むること頗る困難なり、單に或る場合に於て解剖的變化を來たすことを得るも、總ての場合に於て解剖的變化を來たすや否やは未だ容易に斷言すること能はず、今確實に靈示によりて誘發し得らるるもの、最も著しきものを擧ぐれば、

月經にして之は靈示により來潮を促がし、又は之を中止することを得、婦人の性質による事あれども決して疑なき所なり。斯の如く靈示が月經の上に影響するは、平時の場合に於て精神狀態の影響を受け月經の閉止し或は急潮する事より考ふるも敢て驚くに足らず。

靈示により感者の身體に火傷の如き痕跡を生ぜしむることは難事にあらず。例へば、

我が知る老人、夏の一日水田に水を灌がながため、早朝畦草の中に立ちて鎌を杖として停立し居りしに、足に軟き物の觸る、より足元を注視せしに、驚くべき一匹の蝮右足の甲を横切らんとする所なりしに更に恐怖したり、然れども今となりては却りて災を招く愚を爲さんより、不動にして蝮の通り過ぐるを眺め居たり、此時間約五分時蝮は去りて後、右足の甲を見しに通過したる跡は薄き青色を生じ、蝮が足に附着し居るが如き感じを禁じ能はずして、約一ヶ月治せざりきと、此れ深刻なる觀念の生理的變化を及ぼしたる現象なり。

第十五節

靈示と心理現象

靈示感應の心理的現象は興味多く實に不可思議なるもの多し、さりながら前章に述べたる生理的徴候も嚴密に論ずれば、何れも心理的現象なるも

神經末梢及筋肉に關するものを生理的現象となし、皆に大脳中樞の作用のみに止まるものを心理現象として區別したるに過ぎず。

記憶は總ての精神現象に最も密接なる關係を有するものにて、記憶なければ完全なる理解力も成立せざるものなり、記憶には三つの要素を必要とす、一は把持、第二再現、第三再認なり。把持作用とは一度知覺せしものを保持する作用にて、再現作用とは一度把持したるものを單獨に再び意識する働きにて、再認作用とは前に知覺したるものなる事を反證する働きなり。靈示を用ゐて此等の作用を左右し種々不可思議なる現象を惹起する事を得るなり。

感應の度強き者にあらざれば記憶を左右すること困難なり、感性強き感者に「汝の記憶は大に増進した」とか或は「汝の記憶力は減退した」と靈示すれば、其人の記憶は全く増減することを得、尤も感性の度を強くする事を忘る可らず。

吾人の一度注意を以て經驗したる事柄は過去となり、日月を経て全く記憶より消失せるが如きも、感性強き状態に靈示を以て過去の出來事を想起

せしむることを得るものなり。

又戀人をして其人を忘れしめ過去の不利益なる記憶を忘却せしめて、煩悶憂苦を去らしむる事を得るなり。

元來記憶なるものは過去の經驗に基くものにて、靈示に依り過去の經驗を一變せしむれば従つて記憶も一變する譯なり、過去の經驗を一變するに過去の經驗に付全く異なる想像をなさしむれば足れり。換言すれば過去に關する錯覺を起さずることなり、即ち全く經驗しなかつた事を實際經驗した如くに思はせ、又實際經驗したる事を全く經驗したる事なしと思はするにあり、例へば靈感者に「君は昨日某所に於て金の入物を拾つた事を記憶して居る筈だ」と言へば實際金入を拾つたと確信して其に就て種々話をなす。又之と反對に「君は今朝忙はしくて朝飯も晝飯も食へずに居る」と言へば、其通り全く食事をせぬものと確信し、夫と同時に甚だしく空腹を感ずべし。

過去の事柄を記憶より消失せしむる事は既に述べたるが、此と同様の理由により現在の事實の一部又は全部を記憶より忘却せしむることも得、例

へば「君は過去十年間の事を一つも記憶して居ない」と云へば、其人の意識はその十年間空虚となり何と問はるるも答ふる事は困難なり、或は「君は君の姓名、年齢、住所、職業を悉く忘却した」と靈示すれば、其人は自分の姓名は何なりしか年は幾歳なりしか住所は何處なりしか何の職業なりしか少しも記憶せざるに至る、之れと同じ理由により一定の文字を忘却せしめ、又懇意の人を忘却せしむることを得るなり、例へば「君は夕行を忘れた」と靈示すれば、タチツテトの五音は其人の記憶より全く缺除せらるるが如し。

又靈示によりて人を全く過去の生活に還らしむることも爲し得らる、なり。

第十六節

靈示と人格の變化

靈感状態の最も強き時に於ては記憶は孤立の状態に見ゆ、即ち普通時の記憶と注意の集中せられたる時の記憶とは全然連続せず、注意集注時の意識と普通時の意識とは別物の如く見ゆる所より、人格も亦異なるものにあ

行爲に對しても自己の有する智力にて、自己自ら満足し得る理由を發見せん事を努むるは、此れ人に理性の存在せるが爲めなるが、殊に靈示により牽制せられたる事も、又相當の理由を發見するものなり。

或る靈示を與へ或る一定時間を経過して後一定の場合に一定の効果を現出せしめる者を靈示の繼續作用と稱す、例へば「君は後ち何も記憶せぬが時計の十時の鳴る時必ず欠伸をする」と靈示したるに、離感後靈示通りを行へり、繼續靈示は時間、場所、事物を指定する事を得、又一週、一月一年後にも有效なるものなり。斯の理を應用し盜癖ある小供に「若し人の物を盗まんとすれば、汝の手は必ず痺れて盜む事が出来なくなる」と靈示せば、その如くになりて大に恐れて改悟するなり。

- 一繼續靈示は靈感強きを要す、多くは靈示を記憶せず、
- 二繼續靈示の實行中は他の靈示をも受容せらる、而して先の靈示の實行を妨げざる範圍に於て差支ふことなし、
- 三繼續靈示實行後は忽ち感性舊に復す、
- 四繼續靈示實行に就きその動作に相當の理由を付す、

五繼續靈示を與へたる時より之を實行するまでの時間に制限なし、繼續靈示の實行せらるゝ範圍は靈感者の意思、良心、理性、思想、自己靈示等に反對せざる限りに於て最も容易なり。

第四章

第一節

靈妙術施術の準備

靈示感應作用の研究は論理的に研究を爲す者と、應用的に研究を爲す者とを論ぜず、其基礎となるべきもの及び其順序を知る事は必要なる事項とす。前に靈示論、現象論を講述し靈示感應の原理を説明したれば、此等の道理を理解し其骨子を悟りて之を實地に應用せば、何人と雖も容易に之を行ひ諸現象を實現せしむることを得るなり。而しながら學理と實地とは並行すべきが當然なるも、實際に於て學理を實地に應用せんとするには種々なる實地問題の存するものにて、之を研究する事は極めて重要な事とす。

抑も靈示應用をなすに當り、其成功する否とは無論施術上の熟練を必要とする事明かなりと雖も、施術上の準備の完全なると否とは、大なる關係を有するものにて其用意周到なる時は技術の應用効を奏し、其の用意周到ならざる時は折角の技術も概ね失敗に歸せざる可らず、故に實用的技術者たらん者は必ず施術の準備に就き遺漏なきやう注意を怠る可らず、其最も必要な點は感者の

信仰。信任。希望。想像。豫期。
とす。

人間は相互に靈感すべき性質を有す、殊に信仰と信任とは靈示感應の生命にして、若し靈感者に信仰なく信任なくんば、如何に熟練なる術者と雖も遂に施すべき術なかるべし。

信仰なく何等の緣故なき時には如何なる施術も無益なり、釋師も「緣なき衆生は濟度し難し」と嘆じ、キリストも「信仰なき世は救ふ能はず」と言へり、何等の緣も信も希望もなき者には施術することは決して爲し得ず、殊に心理關係なき人を遠方より何等の靈示だも用ゐずして、感應せしむる

ことは全然不可能のことなり。

全く關係なき者に心理作用を起す事は到底不可能なるを免れず、如何に熟練巧妙なる技術者と雖も心理關係なき者を感應せしむる事は決して完全に成功すべきものにあらず、之に反して希望を有するもの、施術を請ふもの、信仰するもの、信任するもの皆其度の厚きに従ひ靈感極めて容易なるものとす。

技術の拙なるものは縁ある者も之を無くし信厚き者を却つて薄くす、巧妙なる術者は微きが如き縁を捕へて深くせしめ、薄き信をも強くして施術に便ならしむ。

信仰と言ひ信任と言ふも靈感者の自己靈示に過ぎず、自己靈示は靈感施術上重要な位置を占むるものにして、被術者にして不信任、又は何等の心理關係なしとすれば、先づ施術の成功覺束なしと知るべし。

然れども自己靈示を以て信任せる者なる時は、毫も施術の方法を用ふることなくして往々其目的を達する事あり、其顯著なる時は靈感者自分其の効を奏して技術者の手を勞せざるものなり。

今基督の事跡に就きて見れば、實に信仰の力の如何に權威あるかを知ることを得べし、基督の許に治療を乞ひて集りし者は、基督が神の子にして大なる豫言者にて又病を癒す偉大なる力を有する方なりとの大確信を抱きて基督に至れば病は必ず癒ゆると固信して來りし患者なれば、基督は「汝の信仰汝を癒せり、立ちて行け」と靈示を與へられしに、多年難病に苦しみし者も忽然として平癒したり、此れ皆信仰の力の結果にして大宗敎家の治療或は奇跡等は、概ね此の如し、信任の力、昂進せる時は其力自ら精神療法の行はるゝこと珍らしからず。

精神的技術の準備に必要なる一大要素は、靈感者の希望なり、希望の深淺は効果の多寡に比例するものにして、希望が極端に高潮したる時は施術は極めて容易なるも、毫も希望なき時の施術は甚だ困難にして、熟達巧妙なる技術も屢々失敗に終る事あるのみならず、多くの場合勞多くして効少なし今此等の別を示さん。

敢て希望せざるも靈感し得る場合は尙施術する望みあり基督は「芥子粒程の信あらば山をも動かすを得べし」とて、精神技術者に一道の光を與へ

られたるは吾人に取りて肝要なる點なり、即ち敢て希望せざるも多少心理關係ある時は、何等の關係なき場合とは大に異り種々方法を用ひて靈感せしむることを得るものなり。

被術者が術者を或る特種の職業技術を有する者と信ぜられたる時は、精神感作を與ふるに尤も好都合なりと云ふべし。

例へば神官とか、僧侶とか、行者とか、祈禱者とか、或はマツサージとか、一の特種の技術を有せる者と信ぜらるゝことは、感應作用を惹起せしむるに便にして彼が信ずるが儘に信ぜしめ、種々の状態に誘導し治療矯癖其他の目的を達する事を得るものなり。

第一節

靈示と豫期

豫期作用は精神技術の結果に大關係あるものにて、靈感を充分ならしめんと欲せば豫期作用を活動せしむること必要なり、若し希望あり信仰あり信任ありとも豫期作用なくば、靈感は不充分なること多し、故に希望、信

仰、信任、豫期に加ふるに想像を働かしむるは靈感の準備整へしむるものなり。

吾人病の時に醫者を希望し、希望すると共に斯くあれば此くせよと教へられたる事柄を信仰し、信仰せると共に、自分の治療を委任せんとこの信任起るべし、信任と共に此の醫師により自分の病苦は癒さるべしと豫期すべし、豫期すると共に想像すべし、此れ一種の自己靈示にして心理的及び生理的現象を誘起するは自然の現象なり、故に今技術者が被術者に對する一舉一動は此等の作用を伴ふものなれば、成る可く高潮なる心理關係を起さしむる様務むる事は甚だ重要なる事とす。

即ち術者の手を接觸すれば被術者の眼は直に閉ぢて開くこと能はざるに至るとか、擧げられたる手、開かれたる手は自由にならぬとか、疾病苦痛は直に癒えるとかの精神状態を以て、餘念なからしめば極めて容易に此等の現象を呈せしむる事を得るものなれば、此の希望、信仰、信任、豫期、想像等の要素をして高潮せしむる方法を考案すべし。

之に反して術者に接すれば不快を感ずるとか、恐怖するとか、病苦を増

す等の靈妙状態も畢竟此等の要素によりて實現し來るものなれば能く注意すべし。

第三節

靈妙術準備奧義

靈示感應をして最も有効ならしめんとせば、被感者の希望、信仰、信任、豫期、想像の作用を要するも、技術者たるものは先づ被感者の靈妙状態を觀破する事肝要にして、此等の要素が具備し居るや否やを鑑別せば、其不完全なりと思ふ點は努めて此の要素を高潮せしむることを要す、靈感の要素を増進せしむるに直接方法としては顯著なる實驗談をなし、又最も靈感の度、強き者の施術の實驗を見せしめ、或は關係書籍を讀ましめる等にして、又間接方法としては新聞雜誌の記事を掲げ、又は廣告をなし人の評判等を藉るなど、一々擧示するに違あらず、靈妙關係の及ぶ限りの方法と各方面より刺戟を與ふる事は、極めて必要の事なり。尤も注意すべきは技術者の品性にして、其品性の純潔にして高尚なるは威力強大にして人を靈感

せしむるに特異の能力を有するものなり之れ靈妙事業の一大秘訣なり、偉大なる人格なくして如何に努むるとも、人工的方法のみにては完全なるを期し難し、故に最も完全なる技術者たらんと欲せば、自分大に其品性の向上を努めざる可らず、不品行、不道德者は理想的技術者となるには、最も有害なるものなれば斷じて不可なりと言ふを憚らず。

第四節

靈示感應と諸覺

靈妙關係を應用せんとする者は、其人の諸感覺狀態を能く觀破し靈示感應に妨害となるべきものあれば、之れを避け或は之を打破、挫折して適當なる靈妙狀態を誘導することは、極めて重要にして術者たるもの、深く注意すべき點とす。例へ術者は信任し來るとも感應の準備狀態具備せざれば、不成功に了ることは前に述べたる所の如し。

人は奇を好み妙を賞し疑を懷きつ、満足なる理解説明を求めんとするものなれば、何等か常人の異とする事は如何なる方法なるか、現象は如何なるものかなど諸種の好奇心を有すること甚だ多し、此等の人々は頭痛を治して呉れよとか、記憶をよくして呉れよとか、術者の鑑別を誤らしむる様に、漠々たる症狀を以て治療否技術の方法を探求せんと試むるものあり、此等の訴ふる所を眞に向け施術せば多くは失敗に歸するものなり。

故に被術者に好奇心ある事を觀破して、之を打破するにあらざれば寧ろ施術を中止して可なり。

近年精神現象研究の流行につれ研究者頗る多し、此等の人士の内には自分の研究の及ばざる所を、満さんがため窺かに何の術者の方法は如何に、順序は如何に、其他面白き妙術もあらんかと考へ、伴り行きて施術を求むる者實に尠からず、又猜疑嫉妬のため其技術を妨害せんとして來る者あり、此等批評的又は研究的心事を以て來る者に對し、それとも知らずして施術せんか長時間徒浪に歸し馬鹿を見るものあり、故に新來の被術者と應接する時は深く注意して、其人物の真相を觀破して之を避け、失敗を未發に防ぐべく留意して可なり。

人生の靈妙感作現象は實に無限無數にして、又其方法技術も一二にして

盡すこと能はず、或は誤解せらるゝ事あり、或は迷信とせらるゝ事あり、或は不合理なる流言等により、施術を希望するも「若しや恐るべきことなきか」等の想像を爲し恐るゝ者少なからざれども、直接には實例を以て恐怖心を去らしめ、間接には實蹟を以て無害安全にして有効なる事を知らしむるにあり。

感應を豫期せしめ自ら其結果を想像せしむるため、猜疑者、恐怖者のため、即ち目前に於て實驗する事は論より證據にして最も理解し易く、自己靈示をして深からしむるに便なり、されども實驗中全身緊張状態の如く其他奇異の感を引き起さしめざるやう注意せざれば、恐怖心を除去せんとして却りて非常に恐怖心を強からしむる事あり。

爰に恐怖心に似て全く反對なるものあり即ち威怖心にして、何れも精神の感作を受け易き状態なるも、恐怖心は術者の靈示よりも自ら恐怖せる自己靈示の結果を誘發し易く、例へば靈感すれば頭痛を起すものならんと恐怖すれば必ず頭痛を起すが如し、威怖心は威服心にして術者の巧妙偉力に威服し、此の術者に向へば何人も直ちに靈感し、その熟練巧妙なる事神の

如しと想像する事にて、斯る人には奇蹟的に奏効する者にて、靈感術者たるものは斯くまでに靈示感性を高潮せしむれば、理想的現象と効果とを收め得べし。

又靈感者にして靈妙的感作を受くる者は、自己の意識の薄弱なるが爲めなり、我が意志は極めて強固なれば、如何に術者が手段を盡すとも、我は感應せず、との觀念より施術を依頼するに拘らず、心中反抗する者あり、或は他人に勧められ厭々施術を請ふ者あり、理性の強き人にして自分常習の病癖と認め治癒を欲せざるも、家族知人等の切なる勧めに否み兼ね、心中反對しながら勉めて同伴し來り、不承知ながら施術を受けんとするものあり、斯の如きは到底奏効し難きものなり、斯の如く反抗的靈力は感應作用の妨害となるは言ふまでもなく、手を下す前によく看破し對者の靈妙状態をして翻轉誘導して靈示すべし、然して反抗靈性を征服し能はざる場合は奏効し難ければ宜しく中止すべし。

第五節

人の靈性は一定不動のものにあらずして、時々刻々流轉しつゝ、ある者なれば種々刺戟を試みて、巧みに轉換せしむる事を必要とす。

熱心なる要求は感應施術に甚だ便宜なるが如きも、靈性の餘りに興奮したる時は靈性の統一を缺くがため屢々靈感し難き事あり、喜、怒、哀、樂等の諸感情が甚だしく興奮せる時は、靈性調和異状を呈し統一するに困難を感ずるがため適當なる沈定法を講じ、被感者の靈性を平穩ならしむべし、例へば笑ふ者に施術する時の如きは、一時笑ひ疲らしめて後施術すべし、總て感覺感情の過度に昂奮せる者は靈感の妨害となるものなれば深く注意すべし。

第六節

靈感作用と生理障害

靈感施術を行はんとする準備としての靈性調和の可否に就き心得べき要

點を講述したり、以上は靈性的状態の方面なりしも是と同時に肉體的状态をも觀察する事は、充分心得べき事とす、通常の心理關係に就て障害となるべき肉體的状态は、又靈性感作にも障害となることは多くの場合誤りなき事とす。

即ち被感者の饑渴に迫れる時、下痢劇しき時、熱激しき時、咳嗽頻發の時、老人小兒の大小便を催せる時、意識感覺の鈍れる時は施術甚だ困難にして徒浪に歸する事多ければ、豫め充分手當を施し然る後靈感を行ふべし。興奮性飲食物を攝取して靈性統一極めて困難なる場合は、普通常態に回復するを俟ちて施術すべし、靈妙作用を應用せんとするに靈調を攪亂せられたる時は、靈感困難なるは言ふまでもなし。

然れども人を見て法を説けと言へば、多少の興奮性飲食物を必要とする人あり、醫師の全身麻醉を施さずして外科手術をなす時、赤酒、ブランドー等の興奮劑を與へ、或る産婆は出産に臨み産婦に同じくアルコール性興奮劑を施して常に良成績を得たる者あり、参考として可なり。

又苦痛烈しき時は靈示感應せしむるに甚だ困難なれども、其苦痛を利用

して以上に強き壓迫を加へて一喝を與ふれば、一轉して苦痛を治するものなり、若し不可なる時は止を得ず鎮痛劑を與へ、一時其苦痛を除去して後施術するを可とす。

不快若くは倦怠せる人には、入浴せしめ身神爽快ならしめたる上靈示を行ふべし、奏功極めて良好なり。

一言すれば各人の靈妙状態を安靜に誘引する事は其要訣なり。

第五章

第一節

靈示法

靈感施術は如何に喧騒、如何なる場所、如何なる状態なるも、巧妙なる技術者なれば敢て此等に拘泥せざるも、完全に成就せしめんと欲せば施術の準備に就き、深く注意せざる可らざる事亦少なからず。

施術の室、位置、場所に對して言へば、騒々しき時は、靈調を攪亂する

がため感應に妨害となるべきものなれば、室は尤も閑靜なる所を擇び、妨害となる一切のもの即ち時計の憂々の音、障子、襖、開閉の音、人の足音、談話の聲の如き出來得る丈け之を避くべし。殊に談話は大聲よりも寧ろ耳語の如き低聲のものは、却りて大なる妨害となるものなり。

非常に喧騒なる場所よりも閑靜なる位置を擇ぶは、靈感作用全然不可能なるがためにあらずして、比較的容易ならしめむが爲めなり。

靈示と明暗。 急激なる強き光線は全神経を早く疲れしむる傾向あれば、之を應用するも可なり、然れども暗所は之に反して神経機能は寧ろ暗き方を便とし、且つ容易なるが如し、されば人の神経機能は沈靜ならしむるに光線弱き室を宜しとなす、日中よりも夜間は感應し易しとす、日中の施術に就ては室の工合に注意し、光線の來る反對の方面に向ふを良とす。

靈示と温度。 温度の高低は感應に大なる關係を有するものなり、即ち寒氣強きか、暑氣甚だしければ感應せざる事あり、適當の温度を保つこと肝要なり。

靈示と空氣。空氣は濕潤に過ぐるよりも適當に乾燥したる方を宜しとす、梅雨の如く雨天續きは宜しからず。

第二節

靈示と第三者

施術場に人の有無はその種類に依れるものにて、信頼せる人の多きを宜しとするも見物人は成るべく無きを宜しとす、要は靈感者の注意の集中を妨ぐべきものは悉く排除せざる可らず、時に見物人の多きを名譽として満場の人氣を信頼して、自ら能く感應するものなきにあらず、若き婦人の如きは何事にも慣れざる事には、直に連れを欲するものなり、殊に何事をせらるゝやとの疑念を抱かしむる如きは、施術に不得策なれば同輩、又は保證人となるべき立會人を設くる方針は一般に採用するを安然なりとす。相當なる立會人を置くことは成功の基にして、靈感の安全を圖るためと、術者を保障する事となるがためなり。

第三節

靈示に必要な器具

被術者の位置は直立、坐位、凭椅、仰臥等なり。要は感者の尤も安靜になり易き位置を取らしめる事肝要なり、室外椅子なき場所、殊に必要な時は直立せしめて施術を行ひ、又坐蒲團の上に坐せしめ柱礎等に凭らしむるも可なり、時に寢臺を望む者あり、最も一般に都合よくは椅子なるが如し、椅子は安靜、仰臥、一睡の快をなすに足るものなれば更に妙なり。されば椅子を第一とし次は寢臺、坐蒲團なり、寒冬なれば暖室爐、暑夏なれば扇風器等の設備をなすべし。

第四節

靈感の難易

人は靈示感受性の最も鋭敏なる動物にして、人は皆多少強弱の差こそあれ靈示感受性を有するものなり、故に何人と雖も皆靈感状態となるべき傾向を有す、人によりて感應の遲速、難易の別を有するも事實なり、今左に

感應の速否、難易等の主なる原因に就き講述せん。

第五節

靈示と男女と年齢

靈示は年齢により感應する割合に大關係あり。三歳より七歳までは母親若くは其家族の如く、小兒の心理を比較的よく理解し居る者には寧ろ容易なるも一般技術者には感否相半すべし。七歳より十四歳までは尤も容易なり。十四歳より三十歳までは感じ易く、三十歳より六十歳に至るに従ひ不感を増加す。六十歳以上年を加ふる毎に靈感鈍きものなり。

靈示感應の男女に關係する所は、時代により一ならざるも、物質的、合理的の作業は男子に適し、精神的直覺的作業は女子に適せる傾向あれども、靈示として吾人の經驗に徴しては、男女の性によりて何等の差異なきものとなす。

教育ある者は事物を理解する能力あれば靈示との關係は、論理的に用ふる時は教育なき者よりも教育ある人は大に靈感し易し、然れども直覺靈示は教育ある者よりも實證信仰は教育無き方靈感し易きが如し。靈示と教育との關係は一概に論じ難し、先づ同等のものとして見て可なり、而して靈示の方法手段によりて差異を生ずるものなり。

第六節

靈示感應と身神の健否

靈示感應と遺傳との關係は大に効否あり、靈感し易き性質の兄弟姉妹は皆よく感ずるが如し。

靈示感應と靈性の健否とは大なる區別を生ず、靈性健全なる人は感應の比例多きも靈性不健全の人、殊に精神病者、白痴等は最も靈感し難し、靈性健全なる人も感應し難き時あるものなれば、靈感せざるが故に直ちに靈性不健全なりと思ふは甚だしき誤解なり、又直ちに感應せざるが故に「白痴なり」と思ふは間違ひなり、健全なる精神を有する人は必ず靈感するものと論じたるに非ずやと、詰問する人もあらん、斯る點に就き誤解せしめぬやう注意せざるべからず。

靈示感應と肉體の健否との關係に就きても、疾病ある者、身體虛弱なる者は總て感應し易きが如く考ふるものなきにあらず、此れ誤解の結果にして、健全の人は感應し易きも身體健全の人は施術を受くる必要なく、希望なく、好奇心や、批評的や、研究的等のため、施術を試むるものにて、之に反して病者若くば身神虛弱なる者は、其治療と健康の恢復を計るため熱烈なる希望を有する者多きがため、無論健全の人よりは却つて病的の人が能く感應するが如く見ゆるに過ぎざるべし。

靈示感應は施術の回数と比例し、不感者は反比例す、可能性は施術の回数と共に容易になり、簡短にして強く感ずるに至るも不感性は之と正反對に施術の回数を重ねる毎に、自分は靈感し難き性質なりとの自己靈示を起し次第に感應より遠かるに至る者あり。

靈示感應と意志の強弱　靈示感應と意志の強弱との關係は、之れも今日尙多くの誤解を有する人多く、總て他人より靈妙的感作を受くる者は、意志の薄弱なる證據なりと確信するが故に、何等の感作を受けざるは即ち意志の強固なるが爲めなりと思ふも、而しながら事實は其反對にして自ら施

術に感ぜんと決心したる人は、意志の強固なる人程靈感し易く、意志の薄弱なる人は常に己の決心し希望したる事をも實現し難きが故に、意志の弱き人は靈感し難し、自己靈示の能力は意志の薄弱なる人よりも意志の強固なる人に存在するものなり、然るにも不拘種々の誤解のため靈感とは意志の薄弱なる者が術者の強固なる意志に威壓せられて感ずる者と考へ「余に術を施して見よ余は決してかゝらぬ」とか「余は術者と意志の競争をせん」とか「余は意志強固なれば到底感應することなし」とか云ふ、此れ自己靈示の爲に靈感せざる者にして之れ意志の強固なるが爲めにあらずして、自己靈示のために注意の集中を妨害したるがためのみ、總て靈示感受性の活動は注意力の凝集を待つて始めて惹起せらるゝものなれば、注意集散即ち意志の強弱は直ちに感應の難易と大關係あること明白なり、故に注意力の強き者は感應し易く、注意力の弱き者は感應し難きものなり。

第七節

靈示感應と速否鑑別

意志の強弱、身心の健否、教育の程度、年齢等は何れも感應の遲速に係あり、然れば此等の觀察を怠らざる事は甚だ必要なる問題なり。

筋肉壓迫法を試むべし。

即ち正坐せしめて左右の手を兩外側後方に、手掌を開きて衝かしめ、腰より上身を稍前方に傾斜せる位置とならしめ。而して「立つこと能はず」と命じ置き、手を離さずして身を起すべく試みよと命じて、立つこと能はざれば可能性の人とするを得べし。

又右の手掌を其人の前額部に横に當てしめ、術者は左の手にて被術者の後頭部を支へながら、右手を以て被術者の額に當てつゝある右手の上に加へ、腕を被術者の臂の下に入れ術者の手にて力を入るゝと共に、其臂を充分上方に上ぐべし、而して被術者に充分力を入れしめ「此の手は額に付き離れぬ」と命じ、予が一喝すると共に引き離して見よと告ぐれば、靈示感性の活動し易き人は離すこと能はざる者なり。

或は両手の力を全く入れざることを命じ置き、術者自ら被術者の手を取り上げ、突然其腕を衝き放すに、若し被術者が全然腕を支配し居らざれば、忽ち墜下するも若し少しにても其腕を支配し居る時は、其腕は舉上せられたるまま其位置を維持するものなり、若し一回にて成功せざれば再三反覆して試みたる上、尙成功せざれば其被術者は感應し難き人なりとすべし。

又一法として被術者の右手の食指を直立せしめ、左の手掌を其上に載せ其重量を一本指のみにて支へる様命じ、被術者の右手を一二三の相圖にて急に取り去らしむるべし、然る時若し左手の重量を右指のみにて支へ居りたりとせば、其支へし指を急に取り去りしと同時に左腕は墜下せざるべからず、若し落ちざりしならば其人はまだ全く左腕の重量を指に委せ居らざりし事を發見すべし、此れも又再三反覆して靈示の意義を理解せしむると共に、誘導に適するや否を試験し遲速難易を判別するに足らん、同時に多くの人に行ふ事も容易なり。

又被術者を直立せしめ、術者は數歩前方に退き双手にて全力を込め、被術者を押し倒すが如き姿勢を以て形式を行ひつゝ、「君は次第に後に倒れる」

と靈示しつゝ、押せば、被術者は實際押さるゝが如き心地になり漸次後方に傾くに至る、斯くて又「今此手を引くと共に君は次第に前方に傾くべし」と靈示しつゝ、手に磁力にてもありて吸引するが如くに引き倒すが如き姿勢を取つて行へば必ず前方に傾くべし。

此等の方法に靈感し易き人は、結局手数を要せずして簡短に深く感應する性なることを知るべし。

第八節

靈示施術上の注意

靈示感應の状態を顯出せしむるに尤も大切なる要件は注意の凝集なりとす、故に感應状態を惹起せしむるには被術者をして務めて注意を集中せしめざる可らず、靈感の成否は被術者の注意の凝集如何によりて決定するものなれば、注意を集中せしむる方法を工夫せざる可らず、成る可く被術者自身に於て注意の凝集し得らるゝ様心掛くべし、若し彼自身に不可能なる時は種々方法を講じて集中點に誘導する必要あり。

其方法として物體を注視せしむることを必要とす、然れども或る物體或る一點を注視せしむるも其人の注意にして、此れより彼れに移り彼より又先に進み轉々流々として取り止めなく、却りて散漫し眼は疲勞せしにも係らず毫も靈感の徵候なき時あり、斯く長く注視せしむる事は視神經を疲勞せしめ結果宜しからず、若し凝視法に據る時は、觀念を集中するやう誘導すること必要なり。

又兩手掌を以て被術者の肩より胸部、腹部、大腿部より下肢に軽く撫下し幾度も反覆する方法も、被術者の全注意はその撫でらるゝ所に集中するが故に、注意の一點に集中する事は又妙法と言ふべし。

斯く注意の集中は靈示感應に必須の要件なれば、若し注意散漫して集中し能はざる人は、靈感應用は到底豫期の如く成効せざるべし、小兒や、老人や、精神病者や、風癩白痴等が靈示に感應せざるは、適當の觀念に注意を注集すること能はざるがためなり。

第九節

靈示と單調刺戟

靈示感應には注意の集中を要し、生理的注意の集中には單調にして輕快なる刺戟は尤も早く成効するものなり、擬擦法に於ても同一部分を幾回も反覆擬擦する時は、被術者をして疲勞せしめ恍惚状態に誘導して靈感に便ならしむ。

又靈示感應状態とならしむるには、被術者の諸感覺の任意の發生は甚だ妨害となれば、成るべく自制し又は制限せしむるは必要の事なり。故に被術者の位置を定めたる時は全身の筋肉を弛めて少しも力を入れざるやう心がくべし、若し身體を勝手に動かすことあれば、其運動に従ふ觀念の活動となりて其人の注意は集中を妨げられ靈感状態に進み難し、然れども痛痒とか、究屈とか、不安の位置とかを覺ゆる時は、豫め其意を満足せしめ置かざる可らず。而して後被術者に安定の位置を取らしめ、夏季は殊に蚤、蚊、蠅等に妨げられざるやう注意すべし。

第十節

靈示と意識の制限

人は睡眠時を除けば常に意識は轉々流々して活動しつゝ、あるものなれば、靈示感應には努めて或る一つの觀念のみ活動せしめ、其他總ての觀念は工夫を以て排除し意識を狭く深くするため制限を加ふべし。

物體の擬擦。注視。は共に之れ意識界の制限狹縮にあれば、如何なる方法を取るも意識界を漸次制限し、縮少せしめ目的とする觀念のみに活動せしむること必要なり。

不可思議なる現象は人を感激せしむる事、尤も甚だしく屢々吾人意識界を制限するものなり、透視の如き、感通の如き、火渡りの如き、驚天的の奇現象は、全く心作用を麻痺したるが如く休止して、何事をも考慮する餘地なからしむるものなり、故に精神治療には氣合を利用するが如きは、之の道理を應用して不意に急激なる刺戟を與へて、意識を急に其刺戟の一點に集中せしめ其瞬間に感應せしめん事を謀るにあり。

靈示感應には被術者は努めて諸種の觀念を自制し、總ての想像を抑減せざる可らず、「予を凝視せよ今感應する」と繰り返して靈示する時は、一部の意識を誘導して注意の集中も自然に行はれ意識の制限も不識の間に行はるゝものなり、虚心平氣とか、無念無想等は一定の觀念を持続して進行するに効あれども、只單に無念無想となり、只單に虚心平氣となりては靈示感應は極めて薄弱となるべし。

第十一節

靈示感應の時間

靈示感應の時間の長短は術者の巧拙と、被術者の準備とによりて定まるものにて殆ど一定するを得ず、殊に術者の熟練と巧妙とは感應せしむる時間を長くし、或は短かからしむ、又被術者の感性强き時も共に瞬間に感應するものとす。

通常五分十分二十分位なり、尤も迅速に成功する時は二三秒間にして感應し長短一定し難く、半時間一時間二時間と時間を費しながら尙無効に終

ることあり。靈感心理の不備、或は反抗し易き人は長時間を費して無効なるのみならず、時に數十回反覆施術するを要する事あり、然れども學術研究のためか若くは何等かの事情あるにあらざれば、強て感應せしむる必要なかるべし、若し必要ある時は如何に長時間を要すとも第一回到感應せしむる事を肝要とす、然らざれば自分は感應し難きものなりとの自己靈示を強からしむるがためなり、斯の如く非常に困難なる人に施術するは勞して効少しの結果となるものなれば、術者たるものは實に非常なる忍耐と熟練とを要するものにして、人格の向上と練修の功を積まざる可らず。

第十二節

靈示感否の鑑別

靈示感應施術をなすに當りて其施術に感應し居るものなるや、まだ感應せざるかを鑑別することは術者として甚だ必要な點にて、初學者の屢々困難を感じ又迷ふ所なり。

容貌を精細に觀察せば心中の状態は、一々其面相に顯はるゝものなれば

相貌によりて判定することを得べし、即ち意識界は益狭少となり一點に集中すれば、他の觀念は漸次減弱して遂に消滅するがため、一點を除く他の活動の支配を受けつゝある總ての筋肉は休止し來る故に、自然に其容貌も弛緩し休止し來りて、遂に恍然として力なく見ゆるなり。

靈示感應の眼に及ぼす變化は著しく、物體なり、術者なり、奇現象なりを注視する時、感應したる時の瞳孔は据はりて不動の状態となる、他の物像が眼に映ずるとも何等の注意を引くことなく印象も起すことなく、鋭敏なるが如くなるも一般状態の活動鈍きは靈感しつゝあるなり。

口角筋は弛緩して緊閉したる口唇は力なく開き若しくは開かんとす、興行場等の看板を見て口唇の弛みて口を開く者は深く感じ入れる證しなり。被術者の口唇堅く閉じたる時は未だ感應の度は淺きものと判定して可なり、之れは其人の容貌と比較して觀察すべし。

靈示感應の度深く進むに従ひ呼吸に及ぼす變化は、次第に深く緩徐となり來る随つて脈搏も強實となり整調し來る、然しながら人によりては之と反對の傾向を呈する者あるも、之れは沈靜せらるべき精神状態が興奮する

がためなれば奇とするに足らず。

靈示感應の程度を識別し難き時は、隨意筋の試験を行ふこと最も捷徑にして明瞭なり、如何となれば靈示にて隨意筋を左右することを得るに至れば、感應したる何よりの證據なればなり。

被術者の眼を閉ぢしめ「其眼は開かぬ」「試みに開き見よ」、君が開かんと努むれば努むる程益々堅く閉ぢて來る、「無理に開かんと欲せば却つて痛みを感ず」と告ぐれば、實際開かんとして開く能はざるに至るべし。

被術者の両手を前方に伸ばして水平にまで擧げ、掌を下に向けその儘持續せしめて「君の手は今重くなつた次第に下がる」と命ずれば命じたる如くなるべし、是は事實と混淆したる靈示にして両手を前方に伸し、高く擧て居れば次第に重くなりて遂に落つるは當然なり、此事實ある上に「今重くなつて落ちる」と云ふ、靈示が加はりて之を事實と混淆したるものを以て漸次靈示性を増加せしめんがためなり、斯の如く半實半虚の靈示に感ずるは感性良好と見るべし。

又両手を前方に伸展して合掌せしめ、「君の手は次第に開く、ソレ掌が離

れた、指も今離れる、ソレ分れて来た、ソレ離れた」と絶へず靈示を繰り返して半虚半實より全く事實に推移せしむ、之れ即ち靈示の作用なり。或は「離れたる手は再び元の如く引付く、ソレ次第々々に近づき初めた、ソレ大變近寄つて来た」と、繰り返して靈示せば必ず元々如く合掌の舊姿に復すべし。或は両手を膝の上に置かして「今君の手が膝に密着して離れぬやうになつた、ドーしても重くて擧げる事は出来ぬ」と靈示し、「サー手を擧げて御覽なさい、ドーしても其手は上がらぬ、擧げる事は出来ぬと繰り返す時は、感應したる人の手は到底離して擧ぐる事は爲し得られざるなり、斯の如く種々筋肉の試験を爲し半虚半實の靈示に感應するや否を鑑別したれば、漸次歩を進めて感應の度を益々強きに誘導して如何なる状態をも惹起せしむる事を得、此等の試験により被術者の靈性状態、或は感應程度を發見し、感性の強弱を判別することは術者の目的を達する上に極めて便利なる事なり。

第十三節

靈示の生命

本章に於ては如何にせば、靈示感應性を盛に働かし得べきかに就き講述するを主眼とす。

靈示感應の生命は被術者の希望、信仰、信任、豫期、想像と術者の確信、忍耐、熱心、至誠、緊張せる努力と巧妙にして適當なる靈示の應用と、境遇の完全なる施設と敬虔の念を生ぜしむべき場所等、少くとも此等の條件の具備したる事の意味に外ならず、換言すれば諸要件の調和なりと言ふを得べし。

靈示感應の現象は太古より千變萬化して定まりなきものなれども、精神感作てふ靈示感性の力を藉るにあらざれば、何等の現象を起すこと能はざるものなり、かるが故に靈示感應の技術は全く精神感作を基礎としたる心理的方法なるが、生理的方法は之に隨伴して生ずるものなれども、繁雜なる諸感覺を統一簡短にし注意を一點に集中せしむるため、或は注視せしめ或は疲勞によりて觀念の叢生を防ぎ或は貧血症狀を誘起せしめて、諸觀念

の沈静を計る方法を總稱したるものにて、心理的方法は其準備として容易なる経路なりと言ふを得べし、而して其生理的方法の重なる點は

注意を一點に集中せしむる事

觀念を統一せしむる事（身體を静止する事）

腦貧血を生ぜしむる事（比較的）

等にて如何なる方法たるを問はず、此等の要素を含むものなれば感應方法となる、故に世上幾多の獨特の方式とか、特別なる名稱を以て靈示的技術を呼ぶ者あるも、毫も不可思議にあらず、古來實に其變化の狀枚擧に違あらず。

第十四節

靈示と心的方法

單に靈示作用を直接利用して靈示感應の觀念、豫期、想像を惹起せしめ、注意を限局し益感性を高潮にする方法を心理的方法とも云ふ、故に格別なる生理的刺戟を與へざるなり。

目的とする觀念、豫期、想像等を惹起せしむるには、靈示の方法として種々なる手段あり、例へば言語、文字、靈符形式、身振、手眞似、手紙、電報、電話等を始め、或は靈感實驗の狀態を目撃せしめ或は理性に訴へ想像せしむる等、靈示の運用法は實に無限にして靈妙なりと言ふべし。

總て靈示的技術は古今を通じて大宗教家により完然なる實行を示されたり、釋迦、基督、マホメツト、弘法大師、日蓮上人、親鸞上人、支那の仙人等を始め、米國にダウ井博士や、エデー夫人の如き其の理想的師標にして毫も間然する所なきものなりと確信す、吾人靈示的現象に志を有する者は必ず研究すべきものなりと信ず。其の尤も顯著なるは基督の奇蹟なり。

癱瘋を病める者四人に昇がれて、エスの許に來り其病の癒されんことを求めしに、エスは其人の大なる信仰を見て「子よ爾の罪赦されたり起きて床を取り爾の家に歸れ」と告げ給ひければ、其人直に起きて床を取收め衆人の前に立ち出でたるに、群衆せる人々皆大に駭き神を崇めて「我等いまだ斯の如きことを見しことなし」と。馬可二〇三—一二

十二年血漏を患ひたる婦人あり、其長き年月の間に醫療のため其財産を倒盡したるも何の驗もなく、その病は益々重るのみなりしが、エスの名聲を聞き若し其衣にだに觸るゝことを得は我病は必ず癒へんと確信し、或る時エスの通行せらるゝに際し群集の中よりエスの後に來りて、其衣の裾に捫りしが不思議やさしも重かりし多年の血漏は直ちに癒へたり。馬可五〇二五—三四

生來の盲者ありしが地に唾して土を和き其泥を瞽の目に塗りて曰けるは「シロアムの池に往て洗へ」と即ち彼往て洗ひしに眼癒へて視ることを得て歸れり。約九〇

基督の治療奇蹟は事業の一部なりしが、如何にして成功せしやと云ふに患者は基督の權威ある奇蹟に偉大なる靈示を受け、基督と聞けば忽ち靈示感應作用を起ししものなるべし。

當時世人の基督に對する信仰は其言行を見聞き非常なる自己靈示を高潮せしめたる事、及疾病治療として完全なる能力者なりと豫期したる事、基督は不思議なる方ある神の子にして不可能なる事なしと想像したる事、

人心觀破に妙を得たる基督は患者の信仰を充分昂進せしめ、感受性を極點まで活動せしめたる事。

而して基督は「爾の信仰爾を癒せり」とか又「爾の信仰の如くなれ」とか、直接にして斷定的なる靈示を單刀直入に與へられたり、實に基督の靈示は明確にして現代的に而かも斷定的なりしなり。

此等の靈示は患者の希望、信仰、豫期、想像を満足せしめ直に驚くべき効果を奏したるものなり。

此の如く基督の治療法は完然せる靈示療法にてありしなり、然れども今日の靈妙術とか特別なる方式によりて施術せられたるものにあらず、彼等は單に基督の聲名を聞き傳へ神の子救世主なりと信じ、死せる人を蘇生せしめたる偉大なる力、不可思議なる力を見聞して不知不識の間に靈示感應の状態が完全に起り居りし場合なるが故に、基督の許に來りて治療を求めたる時は基督の一言一行は最上最高の大勢力を有せる靈示となりて立處に驚天の偉効を顯出するに至りたるものなり。弘法大師、日蓮上人、親鸞上人、ダヴ井一、エデー其他の大宗教家も、基督に於ける

患者と同様なる靈示感作の結果なるべし、故に此等の人々は靈示治療として實に理想的完全なる術者なりしなり、又此等先輩の自然的方法は靈示治療者の好模範として深く研究すべき重要な實價を有す。

第十五節

靈示と豫期

百聞は一見に如かず、應接中も務めて靈感作用の發動を助くるやう充分談話を以て準備し、且つ他人の感應治療を實見せしむれば豫期も、相像も充分活動せしむることを得て、靈妙術の安心なるものとの事を言はずして説明する事を得るなり。

總て靈示感應に關する誤解あらば説破し、眞正の意義を了解せしめ充分満足せしむる様注意すること必要なり。

被術者を安靜ならしめ突然靈示を與ふる事あり、靈示的現象の實驗を見つゝある人の内にて、尤も感じ易き性質の婦人を指し急激に此等の人に向ひ、嚴格なる態度にて「今此の五人の方は感應して起つこと能はず」と靈

示し婦人等は感應するものですかと笑ふ、然れども術者尙嚴然として「否應は言はせぬモウ感して來た起てませぬ、起つて御覽なさい」と威壓的靈示を與ふれば、其時婦人等は起たんとして起つこと能はず、一同等しく靈感せしむる事を得たり。

然れども普通靈性方法のみにては甚だ困難なる場合あり、故に方便として内外感覺を統一せしむるため種々工夫を凝らして肉體方法も適當なるを認む、即ち一定の輕快なる刺戟を與へ注意の集中を促かし雜念を沈靜せしめて、靈感方法を行ふに最も容易ならしむるにあり、故に靈感方法の豫備手段なりと言ふも可なり、通常視覺、聽覺、觸覺等を適當に刺戟を繼續して、多少の肉體作用を惹起せしめ其刺戟を以て靈示に代へ、又は刺戟によりて靈感作用を統一せしめ生理的より漸次心理的に誘導すべし、感應作用は全く心理作用即ち靈示の結果に外ならず、之を證すれば注視は感應を生ずと云ふ自己靈示を有するか、又感應せしむる爲に注視せしむるものなりといふ觀念を、肉體的刺戟は靈妙作用と相待つて完全なる靈感状態となる、又注視せしめ注意を其一點に集中せしめ漸次雜念を去り、觀念の限局せら

れ狭少となるに乗じて靈的方法を施こし、之に依り感應状態に誘導するものなり、此の如くなるが故に注視法即ち肉體方法は靈感的方法の準備となる譯なり、然らざれば單に肉體方法のみにては、靈示作用は生起せざるものなり、靈感方法の之に加はりて始めて肉體方法も生命ありとせらるるに至る。

肉體方法は千變萬化して限りなきが如きも、之を組織する所の要素は極めて少なきものなり。

注視法は肉體方法中主要なる位置を占め甚だ便利なるものなり、術者と相對して注視し視神經の疲勞を感じるに至れば、一種の摸擬作用を生ずるを見る、然れども一念注視する時は多少の苦痛を感じるに至れば、遂に長時間の注視を改良し可及的短時間ならしめんことを期せり、

注視の目的、
注意を集中せしむること、
雑念を歸一せしむる事、
視神經及眼筋を疲勞せしむる事

注視は靈的影響を惹起するものなりとの觀念を與ふること、等の爲に使

用せらる

注視の方法は、被術者を椅子に凭らしめ又寢臺に仰臥せしめ、或は正座せしめ、術者はその側又は前面にありて時計の龍頭、指環、寶石、指先、術者の瞳孔等光輝あるものを宜しとす、何にても一種の器物を定めて注視に價するものなれば、其何品なるや如何なる物體なるや敢て問ふ所にあらず、距離は自由に伸縮し得ることを要す。

注視の距離は人により視力により遠近の差あれども、四五寸より一尺位までを適度とす。位置は眼の高さより少しく見上ぐる角度三十五度より四十五度位を適當とす。

被術者をして眼を充分開かせ一心に其物體を注視し瞬きせしめざる事、時に注視物體をして突然眼に接近せしめ或は環狀を畫きて回轉し、その調和を失はしめ益疲勞を速かならしむる事あり。

注視せしむるには疲勞せしむるを要せざれば、出來得る限り短縮し瞬みせざる時は術者の手にて瞬目せしむる方法あり、即ち瞬間法にては僅々二三秒の注視を以て足るものなり、注視物體を眼前に現はして一度眼より稍

遠く引き離し、再び眼先近く接近せしむれば直ちに眼を閉づべし、或は一
 聲氣合にて瞬時に閉目感應せしむること至極簡短にして便利なる方法なり。
 注視と共に靈示方法を兼ね用ゐざる可らず、例へば「今より此れを注視
 せば直に瞳孔は据はり、視神経は緊張し精神統一し來る」と合圖と共に眼
 を閉づべしと靈示し、充分に豫期せしめて後注視せしめて指拍するなり、
 眼を閉ぢよ、等の合圖をなし命に従ひ來れば靈感の初めなり、瞬間法にて
 は注視せしめ注視物を接近せしむると同時に、或は一喝すると同時に、ソ
 ラ眠つた、その眼はドーしても開かぬと急激に命令して後、種々普通靈示
 を與ふるなり。

第十六節

靈示と擬擦の方法

被術者に任意の姿勢を取らしめ、両手にて顛顛部を壓迫しながら拇指に
 て強く徐々に額を左右に摩擦することあり、或は片手の掌にて額より顔面
 部に觸るゝか觸れざる位の最短距離を以てするか、又は極めて軽く額の中

央より徐々に反復して擬擦することあり、何れの方法によるも反復して單
 調なる刺戟を與へながら「大層よき心地になつて來た」等の靈示を反復す
 ること大切なり。

前額を撫づることは肉體沈靜に有効なるは疑ひを容れず、又右手の人指
 の指頭にて前頭部の中央を力を入れて壓擅するも甚だ良好なり。

肩より指先まで、或は胸部より腹部まで、或は胸部のみ、或は大腿の兩
 側より足先まで、或は頭部のみ撫擦するも可なり、皆術者は常に臨機應變
 の處置を爲すこと尤も必要にて一定の方式に拘泥すべからず、擬擦の回数、
 接觸の強弱等は實驗練習を要する事にて、折々被術者に其感想を求めて斟
 酌工夫し練習する事を怠るべからず。

第十七節

靈示と眼球壓迫——按撫

第一按撫法、第二按撫法、輕重壓迫法、内側壓迫法、等あり、何の方法
 も靈示をなしつゝ、靈妙感應の準備たる事を忘るべからず。

動脈壓迫（腦貧血）、頸動脈の壓迫、顯頸動脈の壓迫、共に靈示の第一着なることを留意すべし。

第十八節

靈示と單調刺戟

音樂、耳の内部の刺戟、手の壓迫、電氣の刺戟、計算法（術者、被術者の二種あり）、索數、呼吸、頭部を回轉せしめ數ふること、術被共に數へること、呼吸法、深呼吸、回頭法、眼の開閉法、温體法（入浴、炬燵、術者手にて温むる法）、急激法、等枚擧に違あらざるも、此等の方法は靈示的現象の準備行爲として只参考とすれば可なり、要は對者の心中に何等かの導火線を結び付くる事にあり。

第六章

第一節

靈示と解除

靈示感應は靈示が中心となり基礎となるものなれば、感應中は誰も通有する所の感性が強度に活動せるものにて、斯る際に術者被術者との間に何等かの關係を提起せしめ、一度靈示關係を生ぜんか人生の總ての現象の根原たる偉大なる力となる至寶なり、此の關係を絶つ時は有害若しくは不用の靈示は之を除去し、又此等の關係により自然生ずべき生活上不利益なりと想像せらるゝ頭痛、頭重、朦朧、疲勞、不快等の結果を生ずることなきやう注意することを要す、又餘りに急激に關係を絶つ時は往々不快の感を感じ起すことあり、但し最初より單短なる靈示のみなれば何等の注意を要することなし、

被術者との靈示關係を絶つは一の合圖に過ぎず、予は常に「サー此れで宜しい」とこれにて充分なり、治療を終りたる時は「ソラ是で癒つたソチラへ行つた」と云ふもよし、一二三と數を計へ三の時特に音聲に力を入ると同時に眼を開かせ、眼を眠らせし者は眼を開かせるもよし、眼を閉じ居らざる者には指拍を以て合圖とするも可なり。感應したる者を一時間なり二時間なり眠らせ二時間後に醒めよと命ずるも其如くなるべし、又感應

状態より未だ關係を絶たざる時、睡眠に變ぜしめ「君は眠たくば充分熟睡して満足なる程眠れば自ら醒めよ」と命じ置けば如何なる人も満足するまで眠れば自然に醒むべし。

或は彈指の音を發して或は軽く手を拍ち、或は大聲を發し或は肩を打ち或は頭部又は顔面を冷却し、或は温むる、頭部顔面に水を灌く事團扇にて煽ぐ、強て眼を開く、被術者自身の豫期作用を利用する、或は藥劑にてアンモニア水を嗅がする等の方法を利用すべし。又被術者自ら靈感を絶つことあるは感應の程度低きか、或は靈示の誤解か、豫期作用の結果なるべし。

靈示不明瞭のため被術者が勝手に靈感を絶つ

被術者自身に之れにて用事濟みたりと思惟して靈感を絶つ

過激なる刺戟のため靈感を絶つ

術者の代りしたため靈感を絶つ

靈感結合不充分なりしたため靈感を絶つ、

術者が被術者を去りたるがため靈感を絶つ、

施術の位置温度變化したるため靈感を絶つ、

原因不明にて自ら靈感を絶つ、

第二節

靈妙術に對する誤解

靈示現象に就き世人の或る一部には種々誤解を抱く者少からず、然れども此は靈性現象の一端を識りて未だ全般を知らざる者か、若くは皆無知らざる人々の想像より生じたる者にて、寧ろ滑稽なるは自ら嫌忌せる靈妙術に喜んで之に感應する者誠に尠からぬ事なり。

而し此れも誠に無理ならぬ事にて、今誤解の重なる者を擧ぐれば或る種の靈示治療を受け、若くは感應を受ける時は甚だ危険至極なる者にて、其結果は精神病となることあり、頭痛、頭重、等を惹起し或は憂鬱症となることあり、呆然自失の様となることあり、或は意志薄弱となり、或は記憶力減退することありなど論ずる者あり、然り若し此等の弊害を誘起したりとすれば、濫用の結果なるか或は非常なる過失の結果にして、必らず普通の結果にあらず。

感應施術をして無害安全ならしむる方法は、相當の智識を有し經驗あり熟練なる技術者が適當に施術する場合には、決して何等の弊害を伴ふものにあらずと斷言するを憚らず、人格崇高なる者の靈示應用治療程無害安全にして有益なるものは他に比類なし。

肉體刺戟は成るべく時間を短縮するを必要とす、注視時間長く繼續する時は甚だしき眼睛の疲勞を來たし充血を起し、或は頭痛を覚え、或は頭重を感じ、或は恍惚となる等のことあれば、充分の注意を以て時間の短縮を計らざる可らず。

若し種々有害なる結果を生じたる時は、靈示を以て之を除去すること必要なり、即ち「君の眼の疲勞は全くよくなつた、頭は軽く氣分も爽快になつた」等の靈示を與ふれば足れり、何となれば靈示に感應しつゝあるものなれば、靈示を以て左右し得るが當然なればなり。

第三節

過激なる靈示を禁ず

靈示感應状態には激動的靈示をなす事は有害なり「汝は一週間の内に必ず死すべし」とか「子の命ずる所に應ぜざれば地獄に落ちて鬼に責めらるべし」など、告げたるを被感者が明確に感ぜしため一週間内に死すべきものとの觀念に支配され精神的に自殺をなすことなきにあらず、又自己の強情のため自ら地獄に落ちて鬼に責められつゝありとの觀念より、一種の精神病となることあり、此等の場合は其等の靈示に打勝つ丈の取消靈示を與へ置くことを要す。

靈示感應状態には一言一句の靈示と雖も、非常なる勢力を有するものなれば靈示は以て人命を救ひ得ると共に又人命を損ふ事も出来るものなれば靈妙技術者たる者は、務めて有害なる靈示を用ゐざる事に留意すべし。

第四節

靈示に反する不良豫期

被術者には種々有害なることを豫期し想像しつゝ、之を秘して施術を請ふものあり、斯る時は自己靈示の結果として施術中若くは施術後、術者の與

へたる靈示よりも被術者の豫期したる通りの現象を生ずるは當然なり、例へば頭痛を起すものなりと信じて頭痛を豫期し、施術を受けたる時は果して頭痛を思ふるが如し、されば何等有害なる豫期作用も働かざる様術者は何時も總ての含有する健全なる靈示を施し置くべし。

靈示感應時間の長短は何等の危険を伴はず。

若し術者の不注意其他の原因により起り易き不良なる結果の重なるものは神経質、食慾減退、業務倦厭、頭痛頭重、壓頭、恍惚状態、腦力減退等なり。

術者たるものは殊に周到なる注意を以て、此等の徴候を惹起せぬやう、積極的に

「精神も肉體も非常に爽快になり、頭腦輕快明晰となり記憶力も増進し、食慾も進み元氣よく面白く業務が出来たるやうになつた」

との靈示を反復すべし。

施術後氣分悪しとか、頭痛がするとか、恍惚とするとか、手足が痲痺したりとか自由にならぬとか訴ふる時は、直ちに靈示をなさざる可らず、施

術の結果に起りたる事柄は如何なる苦痛をも必らず治する事は確實なれば、直に健全にして積極的靈示を施すべし。

第五節

靈示睡眠利用法

人は固より多少の靈示感受性を有するものなれば、何人も感應すべき理なるも尋常の手段方法にて感應せざる人あり、斯の如きは施術の必要を認めざるも、假りに施術の目的を達する必要ありとせば、何とか方法を考へざるべからず、是に於て概略を述べて参考とすべし。

睡眠せる人に靈示を感應せしむるは、吾人は屢々興味ある實驗を行ひ甚だ有益なることを確信せり、格別被術者の承諾を得る事を必要條件とせざるも、睡眠前に於て被術者の睡眠中に靈示感應を行ふ事を承諾せしむれば失敗なきも、無承諾者には往々不成功に終り失敗すること少からず。

睡眠中の者に靈示誘導を行ふ方法は、甚だ簡短にして睡眠者に接觸するか、或は低聲にて被術者の名を呼びて注意を喚起し術者との間に意識の聯

合を成立せしむれば足れり。

即ち睡眠者の側に在りて徐々に若くは「能く眠つた、余は今君に話するから醒めずして聞くべし」との靈示を反復して數分の後、被術者の手を額、胸部に軽く當て「君はよく眠られよ、如何に能く眠るも余の言葉を聴くことを得」と反復靈示し、次に簡短なる試験的靈示を與ふるにあり、例へば「手を握り給へ」と告げて、果して握る時は既に感受したるなり、若し握らざる時は靈示がまだ感應せぬ證據なれば、尙幾回も反復して靈示して感應状態に誘導せざる可らず。

第六節

靈示と童幼

總て精神作業に於ては、言語、動作を理解せしむるを便とすれば八九歳までの小供は往々にして困難なる事あり、二歳以下の兒供は殆んど言語動作の方法には感受し難し、是れ言語動作の意義を解せしむること能はざるが故なり。

然れども幼兒に最も多く接近し親密なる人にして術者なる時は、一種特別なる關係を有するものなれば半睡半眠の際に、幼兒の尤も解し易き言語動作にて反復すれば奏効顯著なり、又熟睡中感應状態に誘導して靈示すれば大なる効あり、子供には父母若くは信賴せる子守等は他の大人の技術者よりも巧妙なる事多し。

如何に幼少なりと雖も既に言語動作を解せる者は、言語の理解せらるゝ範圍なれば既に言語靈示を受くる者なり。

四五歳以上の子供は靈示感應稍容易なり、然れども小供には睡眠前に「今夜眠つて居る時お話をするから起きないで眠つた儘聞いて居なさい」と命じ置き、熟睡期を過ぎてより身體に輕き刺戟を與へつゝ、徐々に其名を呼び話を試むる時は靈示に應ずるに至るものなり、兒童を驚かし醒まさぬ様注意すべし是の方法最も有効なり。

例へば満二歳の女子にして些細なる事にも至つて泣き易く、日に數十回なるを知らず五月蠅ければとて正に眠らんとする時、頭を撫て輕快なる刺戟を與へつゝ、「嬢はモウごんなにしても泣かないやうになつた、強くなつ

たからモウ泣かない」と反復靈示せしに、不思議なる程翌日より泣かなくなれり。

五歳の男兒にして何か物言へば口汚く馬鹿！、馬鹿！と言ふ事を覚え如何に訓戒するとも容易に改らざりしに、靈示法により睡眠前に注意を與へ置き一度小便のため眼覺め、再び就眠せんとする時誘導法を以て靈示を與へしに、果して感應せるや否や手の筋肉試験をなしたるに感應状態となり止動したれば「坊はモウ馬鹿と言ふ事を言はぬキツト言はぬ様になつた、賢くなつた馬鹿と云ふことは言はぬ」と反復したるに翌日より果して忘れたるが如く再び口にせざりき。

第七節

靈示と乳兒

乳兒に對する靈示威應は大人に於けるが如く顯著ならざるも、母親の乳汁を吞みつゝある小兒は親子の親密なる關係あれば、其母親に靈示を施し物質的には乳汁の性質を變化せしめ間接に効果を及ぼし靈的には直接間接

靈妙の傳達により感化を與ふべし。

例へば親の感情激したる時は、忽ち乳汁に影響し甚だしきは小兒に下痢發熱を起し感情にも大なる變化を生ず。

夜泣を止むるに歌、禁厭により、物質的媒介を要せずして治癒し、痺疔を祈禱によりて符治するが如し。

之れ無稽の妄説にあらず靈妙術に於て靈示傳達により、遠隔治療をなすも其理こゝに存す。

第七章

第一節

靈妙術治療

茲に靈妙療法と稱するは、精神治療とか感應療法とか心理療法とか稱せられ、古來人心の間に伏在して吾人生活中に諸種の形態を以て、顯はれつつありしものにて今日所謂精神療法が著しく進歩し、心理現象と比較研究せられ接近結合して漸次完全なる域に進みつゝあるものなり、故に其原理

に至りては自然の理法と一致すべきものなり。

百二十二

第二一節

疾病の活察

靈示感應療法は被術者の精神作用を中心として、其靈示感受性を強盛に活動せしめ其機に乗じて勢力ある靈示を與へ、適當なる靈性を誘起し其結果生理的的心理的作用を誘導して治療矯正の目的を達するものなり。

靈示の勢力に就きては靈示現象論中に述べたる如く、高潮せる場合には實に生死を左右し得るものなるが故に適當なる靈示により一定の觀念を惹起し、治病矯正の目的を達するものなり、人の靈妙状態を看破し適當なる治療靈示を與ふる事は決して容易なる業にあらず、該術に就き相當なる智識と手練とを有せざる時は、折角の靈示も遂に何等の效果をも呈すること能はず、斯の如く靈示治療は一の靈妙なる技術なり。

諸病治療上精神作用の關係が偉大にして勢力あることは人の皆よく知る所なり、時の古今を問はず、地の東西を論せず、廣く精神療法の實行せら

れたる事は、今更不可思議とするに足らず、只惜むらくは今尙物質科學に没頭して治療上、靈感作用の原理も知らずして、靈示現象を一概に非難せんとする者あるは、實に慨嘆に堪へず。

疾病と靈感作用との關係並に靈妙作用の疾病及び治療的感化に、偉大なる權威を有するものなるに不係、此等智識なき人は有効のものも無効にせんとする眞に情なき人と云ふべし。

心理療法と靈妙療法とは全然同一物なるやと問は、大に然らずと答ふ。靈妙療法に於ては患者の靈感性が如何なる程度まで働き居るや充分鑑定する事能はず、故に驚異的奏効を呈すると共に時に無効に終る事なきにあらず、然るに心理療法にては感應判定法を用ゐ、患者の感受性の程度を確定することを得るものなり、故に靈妙療法に於ける靈示は不明に屬することあれども、心理療法に於ける靈示の反應は比較的確實なりと言ふべし、而しながら靈妙療法は心理的療法其他古法の法を含有す。

疾病習癖は如何なる者も必らず全治するかとの質問する人あれども、人は原則として健全なるものなれば悉く全治すると答へたきも遺憾ながら然

百二十三

りと言ふ能はず。例へば肺結核は普通醫藥療法の範圍内にあれども今日の所にては、如何なる肺病も必ず藥用療法にて全治せしむると保障すること能はざると同じく、靈妙療法も之と同じく靈妙療法の奏効すべき見込あるも、其疾病の状況及患者の性質、心理状態等は大きな關係を有するものあり。例へば肺結核を靈妙療法範圍に加ふると雖も必ず全癒するものなりと斷言主張する者にあらず、所謂肺結核の初期より二期位までの患者なれば、靈示療法にて屢偉大なる効果を奏したることは事實にして尙進みたる患者にも、靈示療法にて食慾を増進せしめ胸部に於ける疼痛杯を除去し、且つ常に安眠して平和なる日を送らしめ充分營養を盛んにして精神を静め、樂天的に實行せしめる等によりて非常に驚くべき奇功を奏したることあるは疑ふ能はざる所なり、されど此等の事實あればとて吾人は如何なる肺病も必ず、靈示療法にて癒えるものなりと大膽に結論して應用範圍に加へたる者にあらずるを知るべし。

靈示治療の有効なる事は天下に隠れなき一大事實問題にして、効力の有無は決して争ふべき事にあらず。

第三節

靈妙術治療法

靈示感應療法は至極單純なる原則に基くものなれども、之を實地に運用するに至りては甚だ複雑なるものなり、されば精神治療を研究するに當り始めは入り易けれども、其蘊奥を深く窮めんとするは甚だ至難の業なり、故に靈示療法研究者は多年の實驗と熱心なる研究とによりて、得たる所を最も巧妙に、最も機敏に運用して、始めて鬼神を驚かすが如き奇効を奏するを得るものなることを忘却すべからず。

總て靈妙には必ず之に伴ふ所の肉體的及び靈性作用の二者ありて、靈示療法の原則は患者の病的靈性及び病的自己靈示を充分に觀破し、此等を打破して之に代ふるに健全なる靈性、健全なる自己靈示を以てすれば、新たな靈性は忽ち新たな肉體及び靈的作用を惹起し、若くは漸次に同様の作用を惹起し疾病は變じて健全となり、治療矯正の目的を達することを得るに至るものなり、然れば靈示治療の目的を達すべき秘訣は

一先づ患者の疾病の原因を探求し、務めて其の病的靈性及び病的自己靈示を看破せざる可らず。

二患者の病的靈性病の自己靈示を觀破せば、務めて此等の諸觀念を排除せざるべからず。

三病的靈性を排除すると同時に健全なる靈性と、自己靈示とを惹起せしむる事。

故に先づ患者の主なる訴を聴き、其發病に關する前後の總ての事情を明かにし、此と同時に出來得る丈患者の性質、智識の程度、宗教の如何等より平常の品行、嗜好習慣等を探求し、此迄は如何なる療法を受けしか、次に患者の年齢、職業、身分、財産、家庭等より、社交上の境遇等を詳かに知ること必要なり。

靈示をして充分奏効せしむるには、患者をして「先づ自分の疾病は靈妙治療によりて必ず癒される」と言ふ確信を起さしむること必要なり、此等は所謂健全なる自己靈示の主なるものなれば、此の確信、信仰、信念さへ堅固なれば疾病の或種のものには全癒すべきものなり、故に靈示治療を行ふ

に當りて、靈示の應用により患者をして果して此の如き確信を惹起せしむることを得るや否やは術者の尤も苦心をなし、當に務むべきの緊要問題なり。

患者の術者に對する信仰最も深く、恰も基督に於ける患者の如くならば、術者の靈示は深刻なる印象を與へて著しき効果を奏するは、毫も疑を容るる所なし、されど若し術者を信ずること此の如き程度に達せざる場合は、所謂方術を盡して患者をして信仰を高ふし、靈示感性を強盛ならしむること必要なり、何となれば一旦感應状態となさしむれば、靈示は次第に容易に効を奏するに至るがためなり、即ち靈示感應中は病的靈性或病的自己靈示を排除し、此に代るに健全なる觀念、健全なる自己靈示を惹起することは、極めて容易なるが故なり、之れ靈示療法の最も大切なる位置を占むる所以なり。

斯の如く靈示療法は患者の靈示感性が強大に活動する時に當り、治療矯正の靈示を與へ健全なる觀念を惹起し、是によりて肉體的靈妙的作用を誘導し以て治療矯正の目的を達するものなり。

精神療法は如何なる疾病治療に應用せられたるに論なく、皆此の一定の方式によりて行はるゝものなり、而して靈妙療法の靈示の撰定に就きては實に臨機應變の處置を取るの外、決して何等一定することは出来るものにあらず、何となれば患者の靈性状態は千差萬別にして二人として同一なる者あらず、故に同一種類の患者に對しても始終同一方法を施すは不可なり、例へば十人の胃病患者ありとするも其十人に施す所の方法は皆異ならざるを得ず、即ち患者の靈性状態が要求する所のものにして各異なれば、從つて其施術も勢ひ異ならざるを得ず、故に此の複雑なる間に處する過失なからむことを欲せば、常に靈示療法の基礎となり中心となるべき所のものを忘却することなく臨機應變の處置を施すこと甚だ肝要なり。

靈示をして最も奏効確實ならしむる爲には、種々なる注意を必要とす感應状態の強弱及び靈示の巧拙は効力の有無に密接なる關係あり、即ち感應の度強き時は靈示は比較的容易に成功する者なれば、出來得べき丈け感應の度を強大にする事は成功の秘訣なり。

又如何に感應の程度強大なるも、術者の投與する靈示にして甚だ拙劣な

れば、之れ又成功を保し難し、されば靈示術の成敗は靈示の巧拙と感應程度の強弱とに密接なる關係あるものなり。

例へば、禁煙を靈示せんとするに感應状態弱ければ非常に熟練したる術者が、巧に禁煙の説明を爲して理解せしむるにあらざれば、殆んど成功し難きも感應状態にして強大なれば、單純に「煙草は味も香もなく甚だいやになれり、吞めば頭痛がし、胸が悪くなり、逆も喫めない」と靈示すれば、其靈示は立派に受容せられ靈示通り甚だ厭ふべく、再び口にする能はざるに至り満足を以て禁煙するに至るものなり。

患者の病的靈性や病的自己靈示は、恰も籠城したる敵の如くなり。然れば術者は此等を排除し攻落するの目的を以て種々なる方面より、患者の訴ふる病的状態を巧に攻撃し征服せざるべからず。

例へば、頭痛を訴ふる者あれば「頭痛は癒えた」とか「モ―頭痛はせぬ」とか「頭は氣分よくなれり」とか「頭は非常に軽くなつて氣持が甚だよい」とか種々なる方面より靈示して治療の目的を達するを得るなり。

病的自己靈示を發見せば、その靈示に代るべき健全なる力強き靈示を與

ふることも大切なり。

例へば「夕立の来る日は必ず頭痛がする」とか「天氣が悪ければ必ず頭痛がする」とか云ふ自己靈示を有する人は健全なる自己靈示を維持せしむれば、如何に雷雨の日も鬱陶敷天氣にても愉快に暮す事を得るに至るなり。

總て靈示的療法は一時的のものなりと攻撃する人あるも、必ずしも然らず、此の如きが故に力めて靈示を繼續的に働かせ、治療矯正の目的を徹底せしむることは甚だ必要なり。

一度與へたる靈示にして一生涯を通じて働く事、又少なからず、昔し通りし狐塚とか、雀百まで踊り忘れぬなどその一例なり。

靈示を與ふるに當り餘り激突なることをなさず、秩序を正しくする事は靈示を奏効せしむる樞要にして、秩序ある靈示は靈示應用術の鍵鑰なり、然れば治療靈示を施すに先立ち、それ／＼準備を爲し順序を追ふて進行することは尤も必要なり、準備を爲さずして不秩序なる靈示を與ふるも殆ど失敗に歸すべし。

信仰、信任、豫期、想像が如何に大切なるかは既に述べたり、患者は深く信せざるのみか反つて之を疑ふ場合に於ても、若し一旦深き靈示威應の境に入れば、靈示の威力はよく敵の自己靈示もよく打破し征服し得て、治療矯正の目的を達することを得るものなり。

例へば、「余の病氣は慢性なれば如何にしても急には全快せぬ」と信じ居る人にも、感應中なれば巧みに充分強き靈示を與ふれば、遂に其の靈示の威力は被術者の不信仰、不信任に打勝ち、靈示療法の目的を確實に達することを得、故に被術者が如何に不信仰、不信任を告白したりとも、失望することなく之に打勝つやう大なる信念を持ち向はざる可らず。

最後の治療靈示を與ふるまでには、種々準備試験を行ふは甚だ必要なり、準備試験は感應を益々強からしめ、又其程度を檢定することを得て、靈示の成功を愈確實ならしむるものなり。

例へば、前の禁煙法を行ふに香味の錯覺を起し得るや否やを試験し置く事は、實に安全にして成功の秘訣なればなり。

靈示は成るべく各方面より與ふるを肝要とす、現在歐洲戦争の武器の如

く海上に海中に地上に地中に空中に、それ／＼精巧なる機械と工夫とを以て、人智の限りを盡せるが如くに靈示療法に於ても又物質的若くは靈性的のみの靈示のみにて満足せず、總ての事象にして直接關係あるものは採りて之を用ふる事に努むべし、靈妙治療は總て物質方法を併せ用ゐざれば、多くの患者は物足らぬ感を起すもの實に少からず、是れ一は疾病には必ず藥物を用ふる習慣の存在するのみならず、薬も瞑眩せざれば其病癒えずと信ずる人々にとりては有勝ちの事なり、故に斯る場合に種々なる肉體方法を利用し、薬用のみならずマツサージ、電気、注射、鍼灸等を施術して被術者の希望を満足せしむる事は靈妙療法成功の秘訣なり。

例へば、藥物には靈示の効力なき時もこれが爲め、被術者の靈感作用は非常なる満足を以て靈示の効力を顯はすものなり、

例 神経痛に靈示のみにて十分満足なる成績を挙げざる時、蒸餾水の注射をなし忽ち全癒する事實珍らしからず、

靈示感應は直接なる程、威力強きものなるが、又時として種々なる間接靈示を用ゐて大に奏効する場合あり、

例へば、淺き感應状態に在る人には、實驗による證明談をなし「斯の如き重症も簡單にして即治したり」等の説話は偉大なる力を有する者なり。靈示感應強ければ其人の記憶を左右し得らるゝ事は、靈示現象に述べたるが如し、之の靈妙なる力を利用して失戀に悩める人のその原因を忘却せしめて救済し、又神経痛を悩める人を神経痛に關する記憶を忘れしめて、治療の目的を達することを得。

靈妙施術の効果を完全ならしめんには、施術者の種々なる境遇によく注意して、靈示施術中は可及的之を他人に語らしめざることを必要とすることあり。キリストは病魔を驅逐して曰く「此事を人に語る勿れ」是れ冷笑批難攻撃等を受け、折角快癒に向ひたる者をして再び苦痛に陥入るがためなり、又靈示作用反對に關する書籍雜誌を始め、反對の談話等も努めて避けしむるを良しとす。

靈示感應の要訣は、勇氣、大膽、頭智の併用を最も必要とす、被術者の靈性状態を機敏に觀破し、大膽なる態度を以て其心を奪ひ、勇氣を以て斷乎たる靈示を敏捷に注入して、病的觀念を征服し健全なる靈示を以て之に

代らしめ、所謂心機一轉せしむることが肝要なり、されば其方法如何と尋ぬるも一定の範圍、一定の様式の存するにあらず、又決して一定し得べき性質のものにあらず。

靈示は反復せざれば薄弱なる記憶の如く消滅することあれば、一回にて奏効したる時と雖も一二回若くは數回靈示反復するを安全なりとす。

例へば、一回にして寢小便が全治したりとするも、尙每週一回、毎月一回と數回靈示を重ね、寢小便の全治したりとの靈性を固定せしめ、再び動くこと能はざるに至らしむることを安全となす。

不動の靈性生起せられたる時は、忽ち其靈性通りの肉體作用を生ずるものなれば、再び施術を反復する必要なきが如きも、一種の靈覺は常に繼續して活動するものにあらず、幾多の靈覺必要に當り流々として變化するものなれば、人には種々なる反對作用發生し易く、折角惹起せられたる靈性も動かさるゝことあり、故に施術の反復を以て次第に其靈性を強固にし、再び動かす能はざるに至らしむる事肝要なり、故に反復を要するまでの時間、施術者の新靈性の強弱、被術者の境遇、反對作用の生起如何により

て一定せず、靈示感應薄弱なる時は直ちに二回三回反復するを有益なりとす。新靈性確實なれば一日の内數回重ねる必要なし、毎日一回位宛が適當なり。

病癥の輕重靈示感應の強弱により、施術回数多少は必ず正比例するものにあらず、要は感應の強弱なれば重症も一回にて全治することあり、之に反し感應薄弱なれば如何に輕症なるも、數回又は數十回を要することあり。

施術時間の長短により不満足を感じる者は、長く安眠せしむるも可なり、然れども靈性的効果は時間の長短によらず。

第八章

第一節

靈妙術と手段

吾人生活の現象を基礎とし、自己の思想を中心として兩者相抱擁し、相

調和し行けば其結果や實に健全なり、總て人間の動作には一時も中心を失せざらんこと肝要にして、活動の大なれば大なるほど敏捷なれば敏捷なるほど、中心の確否は、忽ち成敗の決する所となる。例へば座敷に起居する者は一時中心を失ふも顛倒するに止まれども、飛行器の如きものは一たび其中心を失すれば、忽ち身命に關せん。南亞米利加安出斯山脈の高峰一万六千尺の上腹を横斷せる智利より亞爾然丁に通ずる險道の或る所は、數千尺の斷崖に僅か三尺餘の道を巖石を削りて開きたる道あり、馬を驅りて通行するに、上を見上ぐれば斷崖に身を壓せらるゝが如く思はれ、俯瞰すれば更に急斜せる絶壁、見るから下に身を引かるゝが如く、身は急度の傾斜に對して、垂直ならんとするが如く感せられ、往々自己の中心を失して、千崖万尋の難所より轉落し慘死する者少からず（外交官牧童談）

玉乗りの曲藝、自轉車の曲乗り、輕業師の妙技等見る者をして心膽を寒からしむるものあり、彼等の機敏にして輕妙なる技術は、悉く練磨の功なりと雖も、練磨の功を成さしむるものは、時々刻々變化を繼續して運動するに拘はらず、中心點を失はざる微妙の作用一あるのみ、安んぞ中心の保

持なくして此等の業をなし得んや。吾人の生活に於けるも亦然り、健康長壽にして活動せんと欲するものは、先づ第一に見己の中心を確保して、生存中は之を持續せんことを一考せざる可らず。就中身命に密接なる關係を有する、中心を安定ならしめざれば、吾人の生活、目的、事業は殆んど何等の意義をなさざるものとなるべし。

吾人は、無始の境より來りて、現世に發顯して亦遂に無終の域に去るまで、其間一切の行事を爲し、其活動を可及的確實にし、其能力をして無限に増進せしめ、靈妙なる人生と複雑なる社會とを發達せしめんことを欲するものなり。

而して其方法、様式如何と問はゞ、靈妙會は前にも述べたるが如く、方法様式を撰定せず、苟も吾人生活の現象に關係あるものは、悉く取りて之を用ゐ、靈妙力の能率を増進せしめんことを期す。

即ち、自然力、日光、土地、氣候、都鄙、習慣、食物、飲料、消化器、行爲、衣住、教育、職業、社會、遺傳、心理、運動、呼吸、練丹、自他催眠、觀相、易、感情、理性、意志、氣合等、

一一舉示するに違あらざるも、其人の知能に應じて、調和靈妙ならしむれば即ち可なり。

其應用法は、靈示法及び靈示現象に述べたる所を適用し、四覺八感の主力となれるもの、乃ち中心となれる所を觀察推知して、其上位にある感覺に靈示を印象せしむれば、其統一支配下にある總ての諸感覺は、其指揮に従ひて活動し、肉體も組織的變化を起し、其靈示の能力に醇化せらるゝものなり、此れ靈妙術の方法なり。

第二一節

靈妙術と疾病

吾人一たび病苦に罹りて、健全の價値を識るに至れば、人生一切の源は健全に繋りて存するものなるを知るべし。人生健康なくして、何事をか爲さんとする、富貴も權勢も珍寶も何をかせん、只悲壯の思を冲空に走せるのみ。請ふ人生の價値は擧げて健全にありと知らば、貴くして再び得難き身命を無自覺の推移に委することなく、綿々たる過去の結果たる現在に於

て、靈妙の理法と其秩序とを了解して、生活の原則を悟り、靈と肉との異和顛倒より生ずる感覺の錯誤を整調にするは、實に人生の一大事なり。

人は本會の唱道する、四覺八感の調和をして秩序正しく活動せしむるは、之れ健康を保障する原理にして、若し此の調和を失し秩序を亂するは心身の異狀を呈する素因なり、即ち其亂調の輕きものは憂慮煩悶となり重きものは疾病となりて發現す、之を肉體的方面より見れば器質的疾患となり、精神的方面より見れば器能的疾患となる、然れば健康の障害を復歸せしめんには、適當なる靈示法により、身神靈妙の活動を調整すれば諸種の疾病は即ち全癒す。

物質的治療法は、自己自ら行ふを便利とし、且つ効力多大なるも他働的に治療を受くるは比較的効力少しとす、之に反して精神的療法は、他人より受くるを至便とし、自ら行ふは頗る困難なり。此れ只大體の傾向を言ふのみにして、必ずしも判然なる區別を有するものと言ふにあらず。

例へば、日光浴の感度、食物の嗜好及び量、運動の種類及び時間等は、他より指定限量せらるゝは寧ろ困難なるが如し、自己療法に於ても急激な

る觀念の轉換、感情の左右、觀相、祈禱、心理的方法等は、自ら爲し得ざるにあらざるも、常人には多くの場合困難にして、他の技術者より受くるを便利なりと言ふのみ。

醫藥的療法を適當とする疾患は、醫藥に頼るを便とす、又如何なる疾病は精神的療法に適し、如何なる疾病は醫藥の治療に適するやとの疑を抱く者あり、之れ一般治療家の論議する所にして、醫藥萬能精神萬能も共に極端なる論にして本會の取らざる所なり、靈妙會は該問題に就ては、第一患者の意向に任ずを穩當なりとし、第二は最も關係深き者の判斷に委するところなり。何となれば此世に種々の療法多しと雖も、未だ完全無缺にして如何なる疾患も、悉く全治せしむる萬能法なく、如何なる方法も疾病の或る部分の治療を爲し得るの力あればなり。本會は靈妙術獨特の技術を以て、他の方法の及ばざる治療を實行主張するものなり。

第三節

靈妙術と治療法

開端 治療法の大端は人の心意に感應せしことを證するにあり、而して法を證すべし。法を證するに二あり、一は心に理解せしめ、二は身體の現象を以てす。

心徳 治療的技術は理論と辯舌とにあらざ、貴ぶ所は靈妙なる神髓を捕ふるにあり、然る後技術に達し、方に人を感ぜしむべし。

忠心 人熱誠を以て治療を爲せば、必ず靈妙の眞理を得て肉身の缺陷なきに及ばん、不實を圖る勿れ畏縮を生ずる勿れ、熱烈なる眞靈は是れ至重至大にして永福の關する所なれば、心を盡して以て施術すべし。

句鍊 靈示の語句は宜しく精鍊すべし、鄙語を用ふ可らず、太だ急僻なるべからず、甚だ生硬なるべからず、只眼前口頭の常語にして、被術者に曉り易きものを用ふれば、意淺くして義深く正に奏効顯著なるべし。

觀人 施術を行ふ者は宜しく被術者の如何なる人たるかを觀るべし、靈示の意義深しと雖も、被術者の靈能に達すること能はざれば効なし、其人の識る所を視て之を誘發すべし。

其他尙注意すべき事あれども之を省略す、斯の如くにして術者は常に身

を清淨にし、靈氣を活潑にし、威權ある姿勢を持し、熱誠を以て施術にかかるべし。

任意の位置にある患者に對し、施術の上に便宜なる要求をなし、準備整へば被術者の注意を術者に引き付け、術者は靈示法を行ひ、併せて何種の疾病なりとも、手或は適宜の物體を以て其患部に擬し、或は撫擦し、或は接觸し、或は震動を與へて終るものとす。若し患部不明の時は前頭中央部に右諸法を行ふて可なり、又撫擦接觸をなし能はざる時は手を以て、按ずるも亦妙なり。

病名の如きも、一々例記して、此種の疾病は靈妙術に適し、此種のもは斯術の療法に適せずと言ふことあらざれば、病名の臚列を省きて二三の凡例を擧げん。

胃腸病。は食量と作業の不規律なる者の一般に有する疾患なり、病狀も異にし種類も多くありと雖も、胃弱、胃痛、胃痙攣、胃酸過多症、胃擴張、胃癌、胃潰瘍、腸加答兒、便秘、下痢等にして、何れも靈感狀態に際し擬擦、壓迫、震動等と共に靈示を加ふべし。

癩麻質斯。は症狀千差の別あれども、其疼痛患部に震動、擬擦、と共に靈示をなすべし、奏効顯著なり。

神經痛。は多くの場合に於て、醫藥療法にては甚だ困難とする所なり、其如何なる部位に起るとも、靈示療法によれば容易に且つ正確に全治す、治療作法は前條に同じ。

疝痛。は感應の度宜しければ、一回若しくは數回にて全治すべし、之も擬擦、壓迫、急氣、震動等を宜しとす。

火傷。の場合には成るべく患部に觸れざるをよしとす、常に疼痛を除去するのみならず、皮膚の容易に原狀に快復すべき靈示法を行ふべし、効果偉大なり。

脊髓病。は之れまた醫藥の効力甚だ微弱なる病症なるも、時期を失せざれば効果極めて著しきものなり。靈示作法は背部を上より下に脊髓に副ひて擬擦、震動、等を行ひ、施術を反復すべし。

月經異常。精神的感動によりて異常を起したる者は靈示治療法を奏効確實にして簡易なりとす、原因他にあるものは其原病の治療を行ふべし。

肩の凝。は人目に見へぬ苦しき悪癖なり、靈示治療に因り永久に根治す。

以上數種の疾患に對する治療法を示せり、然れども種類の多き病症を全部書き盡すこと能はず、餘は此を以て類推すべし、靈妙術の治療法は藥物を用ゐず、治療器械を用ゐずして専ら靈示感傳の作用により、生活機能の能力を旺盛ならしめ、以て患部の快復更新せしむるものなれば、万一患部病名を誤ることあるも、何等の害を認めず、故に何病症と雖も病者の靈性状態に適合せしむれば顯著なる奏効を呈すべし。

第四節

靈妙術と健康

宇宙の最大奇觀は吾人の身體なり、哲學、心理學、生理學、解剖學等一般科學により窮理せらるると雖も、未だ満足なる説明を得ず、此れ無限進化の過程にあれば、總ての研究説明は恐らく人類の進化と共に進歩するものならん、己れ願はざれども生れ、思はざれども活き、心せざれども動き、

其理を識らざれども生命を愛む、是れ健康を希ふ根元なり。然り而して人生の名譽も戀も權勢も富も力も人をして之を樂ましむる者は一に健全に繋りて存す、健全は人生の畫圖をして秀麗ならしめ、病患は之に反して醜苦ならしむ、健全は人面をして自然の上を濶歩せしめ、疾病は人をして自然屈服せしむるものなり。故に健全ならざる時は人をして生存の悲哀を懷はしめ、世は徒らに懊惱の媒介となるのみ、吾人は素より不老不死を空想せずと雖も、天與の生命を完ふし賦與せられたる機能を遺憾なく使用し、能力を進化せしむるは人生の第一義ならずや。

人にして健全の價値を認め其必要を悟る所あれば、我が靈妙術を體得し、平素の強健を保ち、靈肉の調和旺盛の率を高め、疾病憂患に臨みては此作用を以て回復を速かならしむべし、靈妙術はよく生理に合し、心理に適して靈肉の調和を高め、感覺を鋭敏強壯にし、諸機能を増進堅固にして生命一切の現象を完からしめんことを期す。

第五節

靈妙術と生活

人は無病健康にして活くるのみを以て満足せず、自己に生命を與ふる者を想到確認せざれば止まざらんとす、此に於てか向上あり進歩あり修養あり理想あり、畢竟人生は理想と實現とを接近せしめんと努力しつゝ進歩を企圖するものにして、之れ人類のあらん限り繼續するものなるを覺悟せざるべからず、されど世は事物事象の關係は永遠に紛々擾々として、端倪すべからざるものあり、依て以て妄に生の惑に囚はれ暗中摸索して、却て其生を傷くるに至る。己を知らず對者を識らず其理を解せずして、焉んぞ安全なる生活をなし得んや、宜しく本會の主唱に基き自己を中心とし、心物事象と調齊並行して、一代の能力を現顯して着實不迷の人生を完ふすべし。

第六節

靈妙術と靈覺の活動

自己を基點として宇宙を觀れば、萬有茫茫として思慮の以外にあり、萬象冥々として知識のよく及ぶ所にあらず、太古に遡れば思ひは杳々として盡きず、高く廣く想を至せば無極に連りて邊際なく、吾人の知覺と想像と

に絶する所なり。

然れども此廣大無邊の大宇宙に整然たる秩序を與へ、森羅萬象に完然なる調和を附與し、星宿列張し整々として、運行し、萬有冥々として存在す、造化自然の默示を肯定せざるを得ざるべし。宇宙の動くや心あり、人の動くも心による、此に於てか心物萬象の相關を想像し、吾人の靈肉も自然の本體と等しきものにして、我は素と其本體より來れるものなれば、我宇宙にあり宇宙又我れに活く、靈我一體身肉一如なり。

自然は一般生物に、完全にして靈妙不可思議なる肉體を與へ、決して之を彼等の意志及び五官六官の管掌となさしめず、我求めざれども心臓は鼓動し血液は循環して眠れども熄まず、肺臓は働き滋養は吸収せらる、自然は斯くの如くにして吾人より心勞を除きて、外部に向ひ充分に使用せしめ進歩を促がす。人類の進化は幾多の變化を経て來り、尙永劫に此の作用を反復し理法と並行して進歩すべきものなり。

人の生涯には生死興敗起伏榮辱順逆の事象は、單一簡短にあらずして一瞥すれば亂麻の如く、何れが眞にして何れが迷なるか、世は優勝劣敗適者

生存の數に漏れず、事物差別の世に棲息して眞如なり絶對なりと達觀するとも、尙「空腹みだらさと寒さと戀と比ぶれば恥かしながらひだるさぞます」、安んぞ渾沌たる世を一喝に洞見するを得んや、物心現象差別世界の裡に生存して差別の制肘を免れんや、されど無差別、無生死、を看過するが如きは又人生の本意にあらず、宜しく絶對を達觀し兼て相對の關係に想到して、事物現象の秩序を了解し、見在世間に身を處するものなれば、君臣賢愚、貴賤貧富、美醜長壽あり、妄に自然法を横斷せんとするは、自ら乖理に墮きて倒るべし。

人は自己の能力を辨へ、性を覺りて可能と不可能とを識別して、柔然錯雜せる世に在りて、己の適歸する所を悟るべきなり。

而して自己を中心とするは大に可なれども、心のみよく境遇を作爲するものと信ずるは不可なり、人生能力の無限と自然理法の無限とは其力を異にす、人の能力は如何に大なるも一局部一時的の勢力に過ぎずして、自然の理法と並行して進み諸現象を創爲し得るも、之を超越し或は横斷するは決して許されず、人の性能は斯くまで自由を賦與せられざれば、徒に神思

を勞する事なく靈妙會の主張する最も安全にして最も確實なる自己と宇宙との調和より始めて人生の最高能力を發揮すべし。而して後、人生の實生活をなし、然る後、靈界事象の萬事を現顯し得るの域に達すべし、神秘靈妙の奥義は別に定むる所あり、就て研究せられん事を乞ふ。

靈 妙 術 終

大正六年九月三日印刷
大正六年九月七日發行

非賣品

編輯兼
發行人

野田爲憲

京都市下京區寺町通り佛光寺下ル三百五十九番地

印刷人

片桐治太夫

京都市下長者町通烏丸西入

印刷所

合資商報會社

京都市柳馬場通二條南入

198

終

